
自由学園～少女の青春録～

黒狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由学園く少年少女の青春録く

【Nコード】

N4987X

【作者名】

黒狼

【あらすじ】

世界に裏切られてしまった優しい少女達が、新たな世界で大切な者達と共に過ごしていく物語……………。

なんかシリアスな雰囲気満点ですが、これは基本ほのぼの&ギャグがメインです！！

この作品ではキャラ設定が原作と大きく変更されていたり、最強チート化されていたりしていますので、お気に召さない方は御退室ください。

これは作者の初投稿の連載小説ですので、投稿不定期で駄文かつ

展開がムチャクチャになったりするかもしれませんが、温かい目で読んでもらえるとう幸いです!!

注意書きが長くなってしまいました。では、スタートです!!!

プロローグ（前書き）

どうも初めまして。黒狼です。

多重クロスオーバーの学園物語は色々な方が執筆していらっしゃる
ので、初心者で連載小説の投稿は初めてな私が書くのはどうかと思
いましたが、執筆を決意しました！これから先、不満も出てくる
と思いますがご容赦願います！

では、どうぞー！！

プロローグ

辺りを炎が包んでいた……………。

まるで地獄であるかのような激しい炎が……………辺りを包んでいた……………。

「……………う……………う……………。」

そこに1人の少女が倒れていた。白を基調としていたはずの服はすでに真っ赤に染まってしまっている……………。

そして彼女の前には彼女にとって大切な2人の親友が倒れていた……………。

だが2人共ぐったりとして動かない……………。

少女は激しい痛みと深い絶望感に襲われながらも口を開いた……………。

「…………どう…………して？…………なんで…………こんな…………。」

尋ねる相手は目の前にいる人間達…………いや…………人間と呼ぶにはあまりにも不気味な格好をしていた。

黒と白を縦で半分に色分けされた仮面、真っ黒なロングコート…………そして、袖口から出た鉤爪のような刃物…………。まさに”恐怖の象徴”と言つに相応しい姿だった…………。

するとその”恐怖の象徴”である1人が少女に答える。

「お前たちは、この世界にはもう必要ない…………それだけのことだ…………。」

「…………そ…………そんな……………………。」

そして少女の意識が薄れ始める…………。

(……………こんなので終わっちゃうの……………そんなの……………やだ……………や
だよ……………。)

少女はついに意識を失い、彼女たちは燃え盛る炎に包まれた……………

……………はずだった……………

……………これが新たな始まりとも知らずに……………

END

プロローグ（後書き）

読んで下さった皆さん、本当にありがとうございます！

いきなり初めからシリアスになってしまいました。私シリアスは嫌いなのですがまだしばらくシリアスな雰囲気が続くと思います。

次から主人公である彼らが出ます！ ではまた次回！

119番は時と場合に応じて通報しろ!! (前書き)

今回から主人公登場!!

いきなり若干キャラが変わってる気もしますが……。

あと今回からOPとEDを加えたいと思います!

まだシリアスな雰囲気は続きそうなので、しばらくは御覧の曲で送りたいと思います!

OP 「PSI・Missing」

〜川田まみ〜

(とある魔術の禁書目録

OP1)

ED 「silent bible」

〜水樹奈々〜

(魔法少女リリカルなのはAs・portable OP)

曲のわからない方はYouTubeなどで検索してみてください。

では、本編をどうぞ!!

119番は時と場合に応じて通報しろ!!

東京都特別行政自治区

学園都市

ここは政府に公認された特別教育研究機関である。東京、山梨、埼玉の3県にまたがり、東京都の3分の1の面積もある広大な土地の中には、都心と肩を並べられるほどの高層ビルが立ち並んでおり、そのほとんどのビルは日本を牽引する最先端の研究機関が所有している。そしてここで開発された技術を駆使した最新のシステムなどを用いて都市全体を統括する。……そう、ここは最早“教育と研究に特化した未来都市”なのである。

そして先に述べたようにここ学園都市は教育を主軸の一つとしているため学校が多数存在し、その人口の約8割が当然学生となっている。

そして現在午後9時……

人通りの少ない通りを3人の男子学生が歩いていった。

????「はあ……不幸だ……。」

この見るからに不幸オーラを放っている黒髪ツンツン頭の学生の名は上条当麻。

見ての通り、不幸が売りの学生^{バカ}である。

当麻「おい！！ 学生と書いてバカと読むなよ！！ 私上条当麻は好きでバカになった訳じゃないんですよ！！」

……地の文に突っ込まないでください、上条さん……。

当麻「バカ呼ばわりされて突っ込まない訳あるか！」

???「当麻、さっきから誰に文句言ってるの………。」

当麻の様子を見ながら苦笑気味に言うこの学生は奴良^{ひな}リクオ。茶色の髪を少し逆立てメガネを掛けている温厚そうな少年である。

当麻「何！？ この俺とリクオに対する扱いの差は！？ なんかし
た！？ 俺なんかしたの！？」

諦めてください！ それがあなたの宿命でありポジションです！！

当麻「何でだ ……！！???つつか、開き直るな ……！！」

リクオ「ダメだ……… よくわかんないけど当麻が壊れちゃったよ………。」

???「ほっとけ、リクオ。当麻がああなのはいつものことだろ。」

リクオにそう言つこの学生は黒崎一護。オレンジの当麻より短いツンツン髪で、やや目付きの悪い少年である……ぶっちゃけ見た目は不良。

一護「うるせえ!! この髪の色は生まれつきだ!! それに目付きも悪くねーよ!!」

リクオ「一護まで壊れた!？」

はいはい、すみませんね。莓さん。

莓「俺は莓じゃねえ!! 一護だ!! わざとだろてめえ!! 絶対わざとだろ!! セリフのところの俺の表記まで“莓”って書いてる時点で明らかに確信犯だろ!! 上等だ!! 今すぐ俺が叩き切つてやる!!」

リクオ「ちょっと!?! 当麻も一護も誰に怒ってるんだよ!?! ああ、もう!?! 誰か止めて!?!」

リクオ君……………頑張れ（他人事だけどねwww）！！

数分後

リクオ「はあ……………2人共いい加減落ち着いた？」

当麻・一護「ああ、悪い……………」

リクオがため息を吐きながら先頭を歩き、その後ろを当麻と一護が申し訳なさそうな様子で歩いているという状況になっていた。

そして当麻と一護は数分前のリクオを思い浮かべ、2人揃ってこ
う思った。

当麻・一護（やっぱり怒った時のリクオは恐え……………）

リクオ「なんか言った？」

当麻・一護「いや、何でもない（何でもねえ）……………」

普通の笑顔で聞いてくるリクオに当麻と一護はある種の脅威を感じ、
そう答えた。

ちなみに2人が今リクオを恐れているのには、リクオのある秘密に
関係するのだが、それには今は触れないでおく。

リクオ「それにしても当麻の不幸体質ってある意味で凄いやね……。

」

一護「朝登校してたら風で転がってきた空き缶を踏んで後ろに転ん
で、その拍子に手放しちまったカバンが走ってたトラックの荷台の
上に乗ったかと思ったら、そのトラックが爆弾で爆破されて容疑
者の1人として疑われ、その事情聴取で当然今日の始業式にも出ら
れず、その上やってきた春休みの課題は爆発で灰になっちまったか
ら提出できずに放課後から夜8時半まで補習を受けることに……
……って、お前本当どこまで不幸なんだよ……。」

当麻「か、返す言葉もありません……。」

リクオ「まあまあ、一護落ち着いてよ……。でも僕たちももう高校
2年か……。」

当麻「そういえばそうだな。去年は恐ろしいほど平和だったから、
あっという間に感じるのかもな……。」

一護「ああ、そうだな……俺たちは……っ!？」

当麻・リクオ「っ!？」

その時だった。突如近くの暗い路地裏から目映しすぎるほどの明るい光が漏れだしたのだ。

当麻「なんだ!？ あの光は!？」

そしてしばらくするとその光は少しずつ弱まり始めてきた。

一護「…行ってみるぞ!！」

当麻「ああ!！」

リクオ「えっ!？ 当麻、一護、ちょっと待ってよ!！」

一護達は路地裏へと入って行き、光のある方へと進んでいく。しばらくして一護達が見つけたのは……

当麻「……光の…球…?」

そう、まさに光り輝く球体だった。青白い光を放つそれはどこか幻想的に思わせる。

そして当麻が近づこうと一歩踏み出した瞬間、光が突然強くなった。

当麻「うわっ!?!」

一護「くっ!?!」

リクオ「眩しい!?!」

あまりの眩しさに一護達は目を瞑ったが、やがてその眩しさも和らぎ始め、ついに消え失せた。そして彼らが目を再び開けて見ると……。

当麻・一護「なっ!?!」

リクオ「お、女の子!?!」

そう、そこには一護達と同じくらいの年の3人の少女が倒れていた。そして彼女たちへと近づいた瞬間、その状態を見て一護達の顔が一層険しくなる。

一護「おい！ こいつら怪我してるぞ！ それもかなり酷えー！
このままだと命に関わるかもしれねえぞー！！」

当麻「なっ！？ じゃあ、早くこの3人を病院に「それはダメだよ、
当麻。」…っ！？何でだよ、リクオ！！ このままじゃ……。」

リクオ「考えてみてよ、当麻。さっきみたいな出来事の後に見れた、
この素性の全くわからない人達を病院に連れていくのはまずいし…
…それに……当麻だってこの学園都市の裏を知ってるでしょ……。」

当麻「それは………けど、じゃあこの三人を放っておくつもりかよ
！！」

リクオの言葉に当麻は言葉を詰まらせつつも反論した。すると、

一護「俺が治療する。」

当麻「一護！？ でもお前そっちは苦手なんじゃ…。」

一護「そうも言われてられねえだろ！ こいつらの怪我は一刻を争う
し、それにリクオの言うことも確かだ。なら、方法はそれしかねえ
………こっからなら俺達の寮も近いな……。当麻はそいつを、リク

才はそつちの奴を運んでくれ！　くれぐれも慎重になー！！」

当麻・リクオ「ああ（うん）ー！！」

今ここに、出会わずのない少年と少女が邂逅を果たした

119番は時と場合に応じて通報しろ!! (後書き)

読者の皆さん、どうも!

黒狼です!

今回主人公を出しました!

上条さんはともかく、一護とリクオを主人公にしたのを意外に思う人は多いと思いますが、主人公キャラの中ではこの2人は結構好きだったので、主人公3人にさせていただきました。まあ、ヒロインが3人ですしね……。

あ、一護と当麻は原作では2人とももう高1なので問題ないですが、リクオは原作だとまだ中1なんですよね……。ですから1人だけ原作と背の高さがかなり違ってます。まあ、その辺に関してはいづれキャラ紹介で書きたいと思います!!

ではまた次回!!

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだね、いやマジで！（前
ほのぼの&ギャグがメインなのでサブタイトルを「銀魂」風にした
のに、全然本文とマッチしてない……。

そしてなんか前話よりグダグダな感じになってきた気もしてきました……。

では、本編どうぞ！

最後にあいつが登場します！！

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだよね、いやマジで！

???「……うつ……あれ……。」

目を覚ました少女が最初に見たのは、知らない天井だった。彼女は自分が布団に寝かされていることに気付くと、栗色の長い綺麗な髪を僅かに揺らしながら、ゆっくり体を起こした。

???「……私……生きてるの?……。」

少女はそう呟くと、すぐに辺りを見回す。すると隣に彼女の大切な友人達が同様に寝かされていた。

???「っ！ フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

少女はその友人2人の名前を呼んだ。すると、

???「……うつ……な、なのは……?」

金色の長い髪の少女が目を覚まし、目の前にいる少女の名前を呟いた。すると、その栗色の髪の少女 なのはは、

なのは「フェイトちゃん!!」

目に涙を浮かべ、金色の髪の少女　フェイトに抱きついた。

なのは「良かった……良かったよ……」。

フェイト「……うん……なのはも無事だったんだね……良かった……」

対するフェイトもなのはと同様に涙を浮かべ、親友の無事に安堵していた。すると、

???「……ん……あれ……ここは……どこや……?」

なのは・フェイト「っ!　はやて(ちゃん)!!」

もう1人の少女も目を覚まし、それに気付いたなのはとフェイトは彼女の名を呼んだ。

???「っ!　なのはちゃん!　フェイトちゃん!」

すると、その茶色いショートカットの髪の少女　はやては2人の

親友の姿を見て、2人と同様に目に涙を溜めながら抱きついた。

はやて「良かった……ホンマに……2人がいなくなったら、私は……。」

なのは「大丈夫だよ、はやてちゃん……。」

フェイト「私もなのはもちゃんというよ、はやて。」

そしてしばらくそれぞれの無事を喜び合っていると、

はやて「ところで、なのはちゃん、フェイトちゃん。ここは一体どこなんや?」

なのは「わからない。私も気が付いたら、ここに寝かされてたから……。」

フェイト「見た目は普通の家の部屋……だよな。」

なのは「でも、どうして私達こんなところにいるの? 私たちは……」

だが、なのはは突然顔を青くさせ震えだした。それを見たフェイト

はなのはの背中をさする。

フェイト「なのは……思い出さない方がいいよ……。」

はやて「せやな……その方がええ……。」

しかしそう言うフェイトはやても若干体が震えている。と、その時突然ドアが開き、

当麻「ふあゝあ……。」

欠伸をしながらその男 上条当麻が入ってきた。そして当麻は目の前にいるなのは達を見ると、

当麻「あっ！ 3人とも目が覚めたのか！ 良かった。一時はどつなるかと思ったぜ……。」

そう言ってホッと胸を撫で下ろした。すると、

なのは「あの、あなたは？」

当麻「ん？ ああ、俺は……」

そこへさらに……

一護「おい、当麻。どうしたんだ？……って、そいつらもう目覚めたのか！」

リクオ「えっ、本当に！？良かった……見た感じ、もうほとんど怪我也大丈夫みたいだね。」

当麻の声を聞いた一護とリクオも部屋に入ってきて、なのは達の様子に当麻同様胸を撫で下ろした。

一護「そついやあ、まだ自己紹介してなかったな。俺は黒崎一護、よろしくな。」

リクオ「僕は奴良リクオ。よろしくね！」

当麻「で、俺は上条当麻。この部屋の持ち主だ。よろしくな。」

なのは「あ、私は高町なのはって言います。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウンです。」

テスタロッサ

はやて「私は八神はやてや。3人共、よろしゅうな。」

当麻「ああ、よろしくな！あ、それと俺達のこととは普通に下の名前で呼んでくれて構わないし、敬語もいらねえよ。こっちも普通なのは、フェイト、はやてって呼ぶからさ。」

リクオ「そうだね。敬語なんかで話し掛けられると変に緊張しちゃうし……。」

フェイト「うん、わかった。ねえ、当麻……どうして私達はここにいるの？」

当麻「……覚えてないのか？」

当麻の問いになのは達3人は首を横に振った。それに対して当麻は3人に有りのままを話した。自分たちが学校から帰る途中、路地裏から突然強い光が現れたこと、光の発する源に向かっていくとそこには青白く光る球体があったこと、そしてその球体が突然光りだし、しばらくしてその光が消えると、そこになのは達が深い傷を負って倒れていたことを……。

当麻「で、俺達で3人をこの部屋まで運んだっ訳だ。」

当麻の話聞いたなのは達はどこか思い詰めたような表情をしながら考えていた。と、ここで一護がそんなのは達の様子を見て、思わず口を開いた。

一護「どうした？ ひょっとしてまだ怪我してたところが痛むのか？」

なのは「え？ あ、ごめんね。全然大丈夫だよ。」

一護「そうか…なら良かった。治療しといたから、怪我はもうほとんど治ってると思うんだが、どうだ？」

なのは「……そういえば私達すごい怪我をしてたはずなのに……。」

はやて「何ともあらへんな。」

フェイト「じゃあ、一護が怪我の治療をしてくれたの？ それじゃあ、一護は治癒魔導士？」

だが、この質問に対する一護の応答はフェイト達にとって想定外の答えだった……。

「一護」……魔導士って何だよ？」

なのは「え……………魔法を使ったんじゃないの？」

すると、

リクオ「……ええと……………魔法って、あの良くアニメとかでやってる魔法のこと？……………」。

当麻「上条さん達はそんなの使いませんよ。」

なのは「……………どういうことなの……………」。

と、ここではやてが当麻達に尋ねる。

はやて「一つだけ質問するで……………ここは何県の何市なんや？」

リクオ「え……………東京都の学園都市だけど？」

なのは「ええええっ!?!? 東京ってことは、ここって地球!?!?」

はやて「でも……学園都市って、なんや? 私らそんな知らんで……。」

その言葉に当麻達は驚きをあらわにした。

当麻「……学園都市を……知らない?……」

「護」……どういふことだよ、一体……。」

と、その時だった。

???「知りたいか? 黒やん。」

全員「っ!?!」

突如聞こえてきた声に全員が驚き、声のした方を見た。すると、窓が開きそこから1人の男が入ってきた。そしてその姿を見て当麻とリクオが声を上げた。

当麻「土御門!?!」

リクオ「土御門君、こっちに戻ってたの!?!」

土御門「よう、上やん！ 黒やん！ リクやん！ 3人共、久しぶりだにゃー!。」

一護「土御門、お前なんでここに?」

土御門「なに、ちょっとした仕事ってやつだにゃー!。」

土御門は軽い調子でそう言ったが、当麻達は“仕事”という言葉を聞いて顔を険しくなった。

当麻「っ！ おい、土御門……仕事ってまさか……!？」

当麻がそう言うと、土御門は先ほどとは違いどこか真剣さを含んだ笑みを浮かべながら口を開いた。

土御門「……ああ、その通りだぜい、上やん。」

すると土御門はなのは達の方を見た。そして……

土御門「俺の仕事は……そこの3人についてだ。」

そして大きく歯車が動きだす

「知らない天井だ……」って、一度は言いたいセリフだね、いやマジで！（後
どうも！ 黒狼です！

やっと当麻達主人公となのは達ヒロインが初対面！ なんか今回ま
で変に長く感じました、たかだか3話なのに……。

そして土御門を登場させました！ やはり学園都市に彼の存在は不
可欠ですからね。シリアス展開になったら、かなり重要なポジシ
ョンになると思います。

ではまた次回！

良いことを言った後にはトラブルが付き物。(前書き)

今回かなりグダグダな上に駄文になってしまいました。そして今回のはとフェイトがかなり空気です。本当すいません……。

では、本編をどうぞ！

良いことを言った後にはトラブルが付き物。

土御門「俺の仕事は……その3人についてだ。」

土御門はなのは達を見ながらそう言った。すると一護は、

「一護」……それじゃあお前は俺達の見たことを……」

土御門「知ってるぜい。俺はそれを調べに来たんだにやー。」

当麻「っ！ じゃあ、まさかあれは!？」

当麻が声を上げて尋ねるが土御門は首を振ってそれを否定した。

土御門「それは違うぜい、上やん。これはあくまで俺の独断だから、そっち側とは無関係だにやー。そもそもおそろくこのことにはこの世界の誰も関わってないし、この世界の誰にもあの現象については分からないと思うぜい。」

当麻「……誰も関わってない？」

リクオ「それにあの光について誰にも分からないって一体どういうこと……？」

当麻とリクオは土御門の言葉の意図が掴めず首を傾げた。

土御門「上やん、リクやんよく考えて見るにやー。俺は『“この世界”の人間には』って言ったはずだぜい。」

それを聞き当麻達はその意味を考える。なのは達は話の中心であるにも関わらず、目の前で繰り広げられる話し合いにただ呆然としていた。と、ここでリクオが何かに気付き、恐る恐る口を開いた。

リクオ「……………土御門君!“この世界の”ってことはまさか!？」

土御門「気付いたみたいだな、リクやん。その通りだぜい。」

そう言うと土御門は再びなのは達を見た。そして、

土御門「そこにいる3人は別世界の……それも平行世界の人間ってことだよ。」

土御門がそう言うと、当麻達はしばし呆然となり部屋の中が静まり返った。すると今まで黙っていたはやてが声を上げる。

はやて「ちょ、ちょお待って！ 私らが平行世界の人間ってどういうことや!？」

土御門「ええと……お前ははやてだったかにやー？」

はやて「な、なんで私の名前を……」

土御門「そんなん自己紹介の辺りから見てたからに決まってるぜいで、一つ聞きたいんだが、お前とそっちにいる……なのはだったか？ 名前からして日本人だな？」

なのは・はやて「うん（せやで）。」

土御門「じゃあ、何県何市の生まれだ？」

なのは「え？ 神奈川県の高鳴市だけ……。」

土御門「…上やん、地図帳持ってるかにやー？」

当麻「地図帳？ ああ、あるけど。」

当麻は地図帳を持ってきて土御門に渡すと、土御門は神奈川の詳細な地図の載っているページを見る。そして、

土御門「神奈川に海鳴市なんて地名はないぜい。」

なのは「フエイト・はやて「えっ！！??？」

土御門「ほいつ。」

土御門から地図帳を受け取ったなのは達は隈無くそのページを見てみるが、

はやて「あ、あらへん……。」

フェイト「う、うそ……。」

なのは「そんな……。」

衝撃の事実を知ったなのは達は呆然とするしかなかった。

土御門「まあ、俺も“学園都市”の存在を知らない時点で妙だとは思ってたが、まさか本当に異世界の……それも平行世界から来た人間だとは思わなかったぜい。」

そして再び静寂が部屋の中を包み込んだ。まあ、当然である。平行世界などという最も非現実的な話が出てきてしまったのだから……。と、ここでリクオがはやてに尋ねる。

リクオ「はやて……一つ聞いていい？」

はやて「……なんや？……」

リクオ「……はやて達から妙な力の気配を感じるんだけど……はやて達は一体何者なの？ それにあの傷だったただの傷なんかじゃなかった。あれは間違いなく戦いで負った傷だよね……一体はやて達に何があったの？」

土御門「俺もそつちが本題で来たんだにゃー。お前らからは何かとてつもない力を感じるぜい、若干冷や汗が出るくらいにな……。上やんと黒やんも薄々気付いてだんだろっ？」

当麻「……ああ。」

一護「まあな……。」

はやて「っ……そ、それは……。」

はやて達は口を開くことが出来なかった。リクオ達を心から信じていることが出来なかったのだ……。この世界に来る前の出来事が頭にちらつくせいで……。するとリクオが語り始めた。

リクオ「ゴメン……。僕達ははやて達のことを全く知らないし、はやて達があんなに酷い怪我をする理由なんて想像もつかない……。でもはやて達が悪い人達じゃないことってことは断言できるよ……。僕達もいるんな人を見てきたから……。だから助けたいんだ、はやて達を。僕も当麻も一護も、困ってる人を見たら助けずにはいられないお人好しだから……。だから話して。僕達ははやて達を絶対に信じるから。」

リクオの切々と話しかけてくれる態度を見たはやては、

はやて「……………ホンマに信じてくれるんか？」

なのは・フェイト「はやて（ちゃん）！？」

はやて「もしここがホンマに平行世界なら、私らのいた世界のことを話しても問題あらへんよ。それにリクオ君達は私達の命の恩人やし、ここまで言ってくれるんや……………本当のことを話さんとな……………」

はやての真剣な言葉になのはとフェイトは口を閉ざすしかなかった。

はやて「……………今から話すんは全部私らの世界の真実や……………」

そしてはやては話し始めた。

はやて達が住んでいた世界“地球”以外にも数多の世界が存在しており、それを総称して“次元世界”と呼ばれていたこと。

そしてその次元世界の平和を守り管理する巨大組織“時空管理局”があり、その組織は魔法を使う“魔導師”と呼ばれる人々の集まりであること。そして自分たちはそれぞれ事件に巻き込まれたことでその存在を知り、魔導師となって時空管理局に入局しそして管理局員となったことを……………。

当麻「地球以外の世界……か……。」

リクオ「それに魔法か……あの時一護が怪我を治したって聞いて“魔法”って言葉を口にしたのはそのせいだったんだ……。まさか本当にあるなんてね……。」

一護「じゃあ、はやて達も魔法の力を……。」

はやて「持つとるよ。それも私らは向こうではエース級の魔導師やっただから。」

土御門「まああれだけ力の気配が大きければそれも納得だぜい。」

リクオ達ははやての話聞いて、それぞれ感想を口にした。だが実は彼らの態度は一般人と比べ恐ろしいほど冷静なのだ……。と、ここで土御門がこう言った。

土御門「にしても時空を管理する正義の機関なんざ胡散臭過ぎて裏が有るとしか思えないにゃー。」

それを聞いたはやて達は皆顔を俯かせた。そして、

はやて「そつや……時空管理局には裏が有ったんや。そしてそれが

大きな事件を引き起こしてしもうた……まあ、それは何とか解決できたんやけどね。でもその原因は局のトップだった人間達の欲望が引き金やった……。だから私らは皆で上層部の裏を調べたんや。もうそんな大事件が起きて、関係のない誰かが傷付くことのあらへんように……。そんな悲しみと憎しみの連鎖が起こさないために……。そして実態解明まであと一歩まで来た……。けど知らなかった……。どんな手を使ってでも上層部はそれを揉み消そうとすることを……。そして……。それは起こったんや……。」

はやて、なのは、フェイトはある世界に潜伏している犯罪者達を逮捕するという任務を受けて、局から派遣された部隊の魔導師達と共にその世界に到着した。そしてはやて達は部隊の魔導師達と共に犯罪者達を追い詰めた時……。突然後ろから攻撃を受けた。その攻撃は……。派遣された部隊の……。味方であるはずの魔導師達だった。そう……。彼らははやて達を抹殺するために上層部によって集められた暗殺者だったのだ……。はやて達は深手を負いながら応戦するも、相手は暗殺に特化したプロである上に人数も多く、徐々に追い詰められていった。そして、リーダーと思われる男の一言ははやて達を絶望へと突き落とした……。

「滑稽だな……。もうお前達の仲間誰も生きていないと言うのに……」

大切な者達の死を告げられたはやて達の心は粉々に砕かれ……。そして、彼女達は地へ墮とされた……。

はやて「……ほんで目が覚めたらこの部屋だったんや。……これが私らに起こったことの全てや……。」

そして再び部屋が静まり返った。なのはやフェイトはすっかり顔色が悪くなってしまい、体も小刻みに震えていた。特になのはは今にも倒れてしまうのではないかと思ってしまうほど酷い。そしてそんななのは達の様子を見て、一人の男の我慢が限界に達していた……。

ドゴンッ

静寂に包まれていた部屋の中に低くて鈍い音が響き渡る。それは……上条当麻が自分の拳を思い切り壁に叩きつけた音だった……。

当麻「……何だよ、それ……何でそんなことのために人の命が奪えるんだよ……何でそんなくだらないことのために3人が傷付かなきゃなんねえんだよ！……何でこの3人の想いが踏み躪られなきゃなんねえんだよ……！」

当麻の叫びは一護やリクオの気持ちも代弁していた。そして当麻は拳を下ろすと、

当麻「土御門……頼みがある。」

土御門「……なんにゃー？上やん。」

当麻「……あの人に会わせてくれないか？」

土御門にそう尋ねた。土御門はそれを聞き、一瞬眉をひそめる。するとさらに、

一護「やっぱそうか……。」

リクオ「僕も同じこと考えてたよ、当麻。」

一護とリクオも相づちをいれた。

土御門「上やん、黒やん、リクやん、まさか……。」

当麻「ああ……なのは達がここ学園都市で過ごすことを認めてもらう。」

なのは・フェイト・はやて「えっ！！??？」

当麻の言葉になのは達は驚きを隠せなかった。それもそうである。

なのは達はこの世界には存在しない人間なのだから、当然戸籍がない。そんな人間を保護するのは警察か、もしくは彼女たちの勤めていた时空管理局くらいである。だが、当麻は学園都市に認めてもらうと言った……つまり当麻達は学園都市の上の人間と交渉できる立場にあるということだ……。

土御門「……やっぱり上やん達は面白いにゃー。いいぜい、あの人に話してみてもやるよ。話が着き次第また連絡するぜい。」

リクオ「さすが土御門君だね……ありがとう。」

土御門「俺はそんなにいい人間じゃないにゃー。ただリクやん達には借りがあるし……それにリクやん達といると飽きないから……。ただそれだけのことだにゃー……。」

そして土御門は出口へと向かっていく。と、ここではやてが、

はやて「なあ、当麻君、一護君、リクオ君。」

当麻「ん？」

一護「なんだ？」

リクオ「どうしたの？ はやて。」

はやて「3人は一体何者や？ 何で出会ったばかりの私らにそこまですてくれるんや？」

リクオ達3人にそう尋ねる。すると、

リクオ「さっき僕も言ったでしょ？ はやて。」

一護「俺達はただのお人好しな高校生だよ。」

当麻「ただちよつと顔の利く……な……。」

リクオ達はそう答えた。と、ここで部屋から出ていこうとした土御門が立ち止まると……

土御門「じゃあな！ 上やん！ 黒やん！ リクやん！ せつかくの美少女3人との夜、せいぜい楽しむんだぜい！……！」

爆弾発言を残し出ていった……そして、

当麻・一護・リクオ・なのは・フェイト・はやて
「……………は(え)?……………」

今日一番の静寂が部屋を包み込んだ……………。

END

良いことを言った後にはトラブルが付き物。(後書き)

どうも！ 黒狼です！

今回は執筆にかなり苦労しました。特になのは達が平行世界から来たということに上条さん達が気付く前の件くだりが書きにくかったですね。気付いた方も多いと思いますが、“魔術”という単語を出す訳にはいかなかったので色々濁した結果、かなりグダグダになってしまいました……。

あとなのはとフェイトがかなり空気でしたね。まあ、それにも訳があると言えはありますが……。

そして最後は微妙にギャグ落ちで終わらせました。かなり無理があるとは思ったのですが、次回に繋がってくるので書きました。

今回は恋愛重視で行く予定です。ではまた！！

魔王？死神？王？ いいえ、普通の女の子です！！（前書き）

やっと投稿できた……………。

今回フラグがバッキバキです！！ そしてかなり長めです！！

あ、ちなみに今更ですが、なのは達の格好は管理局の陸士の制服（茶色のスーツ）です。バリアジャケット姿ではないですよ。

では、どうぞー！！

魔王？死神？王？ いいえ、普通の女の子です！

リクオ「……………はあ……………」

リクオは思わず溜め息をついた。すると、

はやて「ホ、ホンマにごめんな、リクオ君……………」

はやては申し訳なさそうな顔でそう言った。

リクオ「は、はやてが謝ることじゃないよ！！ ただ、ちょっと緊張しちゃうっていつか……………さあ……………」

はやて「せ、せやね……………」

2人の間にギクシヤクとした空気が流れる。ここはリクオの部屋……………その部屋のちやぶ台にはリクオとはやてが向かい合って座っている……………。そもそも何故こんなことになっているのか……………それはほんの少し前に遡る……………。

一護「……なあ、当麻、リクオ……。」

当麻・リクオ「……なんだ（なに）？」

一護「……ちよつと殺^やつてくるわ。」

そう言つて部屋から出ていこうとするが……

リクオ「ちよつと待つて一護！？ やるつて何！？ やるの“や”の字からしてダメでしょ！！ 土御門君をあの世に送る気！？？」

一護「当たり前だろ。」

リクオ「あっさり認めないでよ！！ 本当に洒落にならないよ！？ と、当麻！！ 当麻も一護を止めるの手伝つて！！ このままじゃ土御門君が天に召されちゃうよ！！」

当麻「はあ、しょうがねえな。止める、一護！」

一護「何で止めるんだよ当麻!!」

当麻「あのなあ、土御門にはなのは達のためにあの人との交渉を頼んであるだろうが…。それなのに交渉役をあの世に送ってどうすんだよ。」

一護「うっ……」

リクオ「そ、そうだよ一護。土御門君だってなのは達のために動いてくれてるんだから、そんな酷いことをしちゃ……」

当麻「殺^やるなら交渉が終わってからにしろ。そんな時は俺も参加するから。」

リクオ「当麻!? 殺すことには賛成なの!? ていうか当麻もやる気!？」

当麻「今回は“鉄の処女”を使ってみようと思うんだけど……」。

一護「おお、いいなそれ。」

リクオ「当麻！？ 何で当麻が“鉄の処女”なんて物持ってるの！
？ あれ拷問道具だよな！？ そんなもの一体どこから……………あ、
いいや。何となくわかったから……………」

ちなみに鉄の処女とは中世ヨーロッパ時代に使われていた拷問道具です。見た目は大体2メートルくらいの大きさの聖母マリアをかたどった鉄の人形なのだが、前面が左右に開くようになってその左右の扉の内側には無数の針が付いている。詳しく知りたい方は Wikipedia で調べてみてください！

リクオ「……………つて、そんな詳しい説明はどうでもいいから2人共
落ち着いてよ！！！」

当麻「なあ、ここをこつしたらどうだ？」

一護「お、それもいいな！じゃあ、その後こつして……………」

と、その時……………

ブチッ

……何かが切れる音がした。そして……

リクオ「……………当麻、一護。・。・S しよづか?」

しばらくお待ちください

リクオ「ごめんね、なのは、フェイト、はやて。迷惑掛けちゃって……ほら、当麻と一護も謝って!!」

当麻・リクオ「……………す、すいませんでした……………」

はやて「え、ええよ別に。気にしてへんから……………」

はやては苦笑いを浮かべながら答えた。まあその理由は怒っている時のリクオが某白い魔王に見えたからなのだが……………。

一護「つーか今何時だよ？」

当麻「……午前2時だ。」

リクオ「明日休みで良かったね。」

一護「確かにな。けどマジではやて達の寝る場所どうするか？」

当麻「俺達3人の内の誰かが部屋を空けて残りの2人のどっちかの部屋に泊まって、空いた部屋にはやて達3人が寝ればいいんじゃないか？」

フェイト「そ、そんなの悪いよ！！ 私達にそんなに気を遣わなくて……」

リクオ「でも僕達の部屋って2人が限界だから、3人で寝るのは無理だよ。」

一護「……じゃあそうなるか……」
「……一つしかねえな……」

という訳で結局、当麻はなのはを、一護はフェイトを、そしてリクオははやてをそれぞれ自分の部屋に泊めることになったのだが……

リクオ（お、女の子を部屋に泊めるのなんて初めてなんだけど／／／……。）

はやて（お、男の子の部屋に泊まるのなんて初めてや／／／……。）

お互いに初めての経験であるため緊張してしまっていた。まあ、リクオはおとなしい性格なため恋愛経験など無いに等しいし、対するはやても管理局では人気が高く男性局員からのお誘いを受けることもしばしばあったがそういったものは全て断ってきたし、そもそも知り合ったばかりの男の部屋に泊まるという経験などあるはずもないので、こういう雰囲気になってしまうのは仕方ないことなのだが……。と、ここで、

はやて「そ、そういえばリクオ君の部屋って和室なんやな？」

はやてがギクシャクとした空気を何とかしようとして口を開いた。

リクオ「え、ああ、うん。僕の実家は古い武家屋敷みたいな家だから、和室じゃないと落ち着かなくなって……この部屋も元々当麻や一護の部屋と同じ洋室だったんだけど、無理を言って改装したんだ。」

はやて「そ、そうなんか……。」

……

……

だが一向に会話が膨らまない。

はやて（ダ、ダメや！？ 全然会話が続きへん！ 何でや！？ いてもなら何時間でも喋ってられるのに……と、とにかく何か話さへんと……）

はやては何とかこの空気を何とかしようと思いを巡らせるが一向に打

開策が浮かばずあたふたしていた。すると、

リクオ「……………あのさ、はやて。」

はやて「な、何や!？」

突然リクオに話しかけられ、はやてはやや上ずった声で答えた。そして少しの間が空き、

リクオ「……………ごめんね……………」

はやて「え?……………何でや? 何でリクオ君が謝るんや?」

はやてから見ればリクオは自分を助けてくれた上に、こうして受け入れてくれた人間である。だからリクオが自分に謝る理由がはやてにはわからなかったのだ。

リクオ「……………さっきの話……………あんなに辛いことをはやての口から話させて……………本当は思い出さなくなかったよね?……………」

それを聞いたはやては今できる精一杯の笑みを浮かべ、

はやて「ありがとつな、リクオ君。でもあれは私が話さなあかんことやったんや……こんなことになったんは、私のせいなんやから……」

リクオ「え？……」

はやて「私なんや……最初に管理局の裏を調べようと提案したのは……。勿論あの時に言った私の想いは本物やし、なのはちゃんやフイトちゃんもその想いに賛成してくれた……けど、今でも思うんですよ……私のやったことはホンマに正しかったのかって……なのはちゃんやフイトちゃんを巻き込んで……私の……私の大事な家族を犠牲にしてまでするべきことだったのかって……」

リクオ「っ!？」

はやての言葉にリクオは口を開くことができなかつた。目の前にいる少女は自分の家族を失ったにも関わらず、その悲しみを堪え話してくれたことに衝撃を受けたのだ。

はやて「……あ、あかんや、私。こんなことリクオ君に話しても何にもならへんの……。ほ、ほなちよつと外で風にでも当たってくるわ!」

そう言うてはやては立ち上がるとリクオに背を向けて部屋から出て

行こうとした……だが、

????「……おい……。」

はやて「え……。」

はやては後ろから聞こえた声に思わず振り返り、そしてその声の主を見て……固まった……。何故なら……

はやて「だ……誰や……」

先ほどまでリクオがいた場所に1人の男が立っていた。藍色の外套が特徴の和の服装、どことなく荒々しさを感じる雰囲気、鋭い目付き、そして白黒の長く棚引く髪……全てにおいてリクオと真逆な男である。はやてはそんな目の前の男を警戒しながら尋ねた。

はやて「あなたは誰や？ リクオ君はどこに行ったんや？」

すると、

????「……リクオだよ。」

はやて「……は？」

夜のリクオがはやてに自分の能力について説明するが、はやては目の前にいる男がリクオであると未だ信じることができない。

夜リクオ「まあ、信じる信じないはお前の自由だがな。どうせ元の姿に戻ったところでちゃんと説明するだろし、それに俺はお前に言いたいことがあっただけだから……。」

はやて「言いたい……こと?……。」

すると夜リクオは今まで浮かべていた笑みをしまった。そして、

夜リクオ「……お前のしたことは……間違いなんかじゃねえよ……。」

はやて「え……。」

夜リクオ「お前のいた世界が実際どんな場所だかは知らねえ……だがよ……他の奴らのことを想って闇に立ち向かうのは絶対に間違いないなんかじゃねえ……。」

はやて「……せ、せやけど……。」

夜リクオ「辛いんなら泣けばいい。」

はやて「え、でも……。」

夜リクオ「泣かねえことが強さじゃねえよ。俺のおふくろも言ってたぜ、“女は涙の数だけ強くなる生き物だ”ってな……むこうじゃエースだか何だか知らねえが、今のお前はただの1人の女なんだからよ……泣きたいんなら泣け……。」

リクオの言葉を聞いたはやての心は限界だった。そして……

はやて「う、うわああああああん…………。」

リクオの胸に飛び込み、そのまま大声で泣き始めた。まるで今まで溜め込んでいた感情を全て吐き出すかのように……。そんなはやてをリクオは少々困惑しながらも優しく抱き締めていた……。

しばらくして、

はやて「……すう……すう……すう……すう……。」

夜リクオ「おいおい……そのまま寝るかよ、普通…………。」

現在の時刻（午前3時）と今までの疲れもあつたせいか、はやてはそのまま夜リクオの胸の中で眠りについてしまったのだ……。

夜リクオ「はあ……仕方ねえ……。」

リクオははやてを起こさないように抱き上げると隣の部屋に行き、予め敷いておいた布団にはやてを寝かした。そして部屋から出ていこうとしたのだが……。

夜リクオ「……こいつはわざとか？……。」

はやての右手がリクオの外套の胸袖を掴んでいたのだ。

夜リクオ「……ちっ……めんどくせーな……。」

リクオはそう言って胸袖を掴んでいたはやての右手を掴み無理やり引き剥がそうとした。と、その時、

はやて「……もう……嫌……や……もう……1人になるのは……いや……や……。」

一筋の涙を流しながら呟いたその寝言は最早はやての願いそのものに他ならなかった。

それを聞いたリクオははやての手を引き剥がすのをやめ、

夜リクオ「……つたく、しょうがねえな……。」

はやての布団に自分も入り、包み込むような形で腕を彼女の背中へと回し体を引き寄せ、そのまま眠りに着いた。

〈黒崎一護の部屋〉

少し時間は戻ってはやてとリクオがギクシャクした雰囲気にいる頃、
一護もフェイトを部屋に入れていた。

フェイト「一護の部屋って綺麗に整頓されてるね。」

一護「ん？ ああ、まあな……意外か？」

フェイト「えっ！？ あーち、違うよ！ 別にそういつつもりじや……。」

一護「構わねえよ、他の奴らにもよく言われるしな。さてと、寝る準備しねーと……」

フェイト「あ、手伝うよ。」

一護「平気だよ、隣の部屋に布団一つ敷くだけでし。適当に部屋の中を見て待っててくれ、すぐに終わっからよ。」

フェイト「う、うん。ゴメンね、泊めてもらっ身なのに……。」

一護「言っただろ、俺はお人好しなんだよ。んじゃちょっと待っててくれ。」

そう言っで一護が隣の部屋へ行くとフェイトは

フェイト（男の子の部屋かノノノ……クロノの部屋には当たり前のように何度も入ったけど、さっき知り合った男の子の部屋に泊まることになるなんて思いもなかったよノノノノ……）。

今までに無い状況に少し緊張していた。そしてフェイトはそれを紛らわせようと部屋の中を見回す。すると、あるものに目が止まった。

フェイト「これって……。」

それは棚に置いてあった大きめの写真立てだった。そこには何枚かの写真が飾られているが、フェイトの目を引いたのは一護とその妹と思われる2人の少女の写真だった。

一護「終わったぜ……ん？写真を見てたのか？」

フェイト「え！？ あ、うん。」

突如後ろから聞こえてきた一護の声にフェイトは少し驚いた。

フェイト「この2人の女の子は一護の妹さん？」

一護「ああ。こっちの茶髪でワンピースを着てるのが双子の姉の“柚子”で、そっちの黒髪でボーイッシュな奴が妹の“夏梨かりん”っていうんだ。」

フェイト「へえ、何かそっちの柚子ちゃんよりこっちの夏梨ちゃんの方がお姉さんに見えるなあ。」

一護「実際そうだよ。柚子は天然でおつちよこちよいんだけど、夏梨はかなりしっかり者だしな。一緒に暮らしてて何度も“姉妹逆だろ

” っ て 思 っ た し …… 。”

フェイト「ふふっ、そっか……。」

と、その時、フェイトの頭に2人の子供の笑顔が浮かんだ。1人は10歳くらいの赤髪の少年、もう1人は少年と同年くらいでピンク色の短い髪の少女である。

一護「どうした？ フェイト。」

フェイト「え？ あ、ゴメンね。ちょっと考え事をしちゃって……。」

一護が突然黙り込んでしまったフェイトに声を掛けると、フェイトは一護の方を向いて答えた。すると、

一護「っ！？ お、おいフェイト！ お前何で泣いてんだ！？」

フェイト「え……………」

一護がフェイトの顔を見て驚きの声を上げた。それを聞いたフェイトは思わず右手で自分の頬に触れてみる。すると、確かに涙が流れ

ていた……。

フェイト「あ……ち、違うよ、一護。これは別に泣いてるとかじゃ……えっと……大丈夫だから……その……。」

フェイトは溢れてくる涙を拭いながら一護に心配かけまいとその場を取り繕おうとするが余計に混乱してしまう。すると、それを見た一護はフェイトの両肩を掴み、こう言った。

一護「大丈夫じゃねえだろうが……。」

フェイト「え……。」

一護「涙を流して大丈夫な訳ねえだろうが……んな辛そうな顔して誰が大丈夫って信じるんだよ……なんか理由があんだろ……なら話してみるよ。話さなきゃ何も伝わらねえぞ……。」

フェイト「っ!」

一護の言葉にフェイトは息を呑んだ。それはかつて自分の親友が敵だった自分に対して言った言葉だったのだから……。そしてフェイトはポツポツと語り始める。

フェイト「私、2人の子供の保護責任者になって親代わりをしていたの……エリオとキャロっていうんだけどね……まだ2人共10歳くらいだったんだけど、どうしても管理局に入りたいて言っ、管理局に入っ、私達と一緒に働いてたの……。けど……もう……2人は……」

「護は何があつたのかを悟ると口を開くことができなかつた。すると、

フェイト「私ね……お母さんが好きだつた。お父さんは生まれた時にはもういなくなつたから、私の親は母さんただ一人だつたの。けどお母さんも私が9歳の時に亡くなつて、私は天涯孤独になつた。でもそんな私をある優しい人が養子にしてくれて、母さんになつてくれて、家族の皆も優しくしてくれた……。その時に決めたんだ。私と同じような子供達を救うって……。その子達を守って……。でも……。私は守れなかつた……。家族同然だつたエリオとキャロを……。私は……。」

そう口にするフェイトの体は小刻みに震えていた……。すると、

「護「もういい、フェイト……。」

フェイト「護……?」

一護はフェイトをそっと抱き締めた。そして…

一護「俺もおふくろを失ってるんだ。」

フェイト「え……………」

一護「俺が5歳の時、おふくろは俺を庇って殺された…………その時俺は自分の弱さを呪った。そして決めたんだ。今度は俺が家族を…………袖子と夏梨を守るってな…………だから大切な誰かを失った悲しみも守れなかった悔しさもわかってるつもりだ…………だから無理して強がらなくていい…………お前は…………一人の女の子なんだからよ…………。」

それを聞いたフェイトは一護の胸板に顔を埋めた。そして…………

フェイト「うっ…………ぐすっ…………うっ…………」

静かに泣き始めた…………。そんなフェイトを一護は黙ったまま左手で彼女の華奢な体を抱き締め、右手で彼女の頭を優しく撫でていた…………。

く上条当麻の部屋く

雲一つない満天の夜空……そこには名もない数多の星達が輝き、お互いを照らし合っている……。そんな空を1人の少女　高町なのははベランダからただじっと見ていた。だが、そんな彼女の表情は空とは逆に陰が差していて、その目に光はなかった……。

なのは「……私は……」

意味もなく言葉を発しては止める…少し前からこの繰り返しだ……。一体何時になれば、この無意味な行動は止まるのだろうか……。なのははそんなことを頭の中で考えていた。だが思っていた以上に早くその時は訪れる……。

「眠れないのか？　なのは」

背後から聞こえてきた声になのはは肩をビクッと動かして反応するも、大して驚いた様子もなく後ろを振り返って姿を確認し、名を呼んだ。

なのは「当麻君……」

当麻「……空を見てたのか？」

なのは「……うん……。」

そう言うとなのは再び空を見上げた。当麻もそれに倣い、雲一つない夜空を見上げる。すると、

なのは「こつちの世界でも空は変わらないんだね……やっぱり綺麗だなあ……。」

なのははそう呟いた。そして彼女の話は続く……。

なのは「私ね、魔法で空を飛ぶことが大好きだったの……。一度飛べなくなったこともあったけど、飛びたいっていう自分の思いだけで私は頑張ることができた。」

そう話すなのはの表情は笑顔だが、それは今にも消え入りそうなくらいの哀しみを秘めた儂いものだった。そして当麻はそんな表情で話すなのはの横顔をじっと見ながら黙って聞いている……。

なのは「そんな時、私に凄く大切な子ができたの。その子は普通とは違う子だったけど私のことを“ママ”って呼んでくれて、一緒に過ごしていくうちにいつの間にかその子は私にとってかけがえのな

いものになつてた……。私達2人を引き裂くような辛くて苦しい事もあつたけど、それも2人で正面から向き合つて乗り越えた……。その時決めたの……。この子を“母親”としてずっと傍で守つていこうつて……。この子と一緒に見上げるこの空を守つていこうつて……。なのになのに……」

なのはの顔が俯くのと空を大きな雲が覆つたのは同時だった。そして当麻は暗くなつた世界で見た……。なのはの頬に伝ふ涙を……。

なのは「それなのに……守れなかった……どっちも守ることが出来なかった……。もうあの子には……“ヴィヴィオ”には会えない……。……どんなに手を伸ばしても、もうヴィヴィオには届かない……。もう私には……何も守れ……」

なのは最後まで言葉を紡げなかった。何故なら……

なのは「当麻……君……？」

当麻がなのはの頭を自分の胸に押し当ててきたのだから……。そして当麻はそのままなのはに語り掛ける。

当麻「……信じる……」

なのは「え……………」

当麻「信じる…………お前とヴィヴィオはまた会えるって…………。」

なのは「…………でもそれは…………もう……………」

当麻「確かにそれはどうしようもないくらい儂くて、すぐに消えちまいそんな幻想だろう。けどその幻想は誰にも否定することはできないし、消すこともできないだろ。これはお前だけの幻想であり…………何よりお前の願いだろ？ ならお前が信じてる限り、その幻想はずっとお前の中で存在し続けるし、信じ続けてればきつとそれは現実になるさ。もしそれを踏み躪ろうとするくだらない幻想があったらそんな時は…………俺がその幻想をぶち壊してやるよ。」

その言葉を聞き、なのははふと顔を上げると、ちょうど雲の影が消え始めてきた。そして完全に消えると、そこには柔らかい優しいげな笑みを浮かべる当麻の姿があった。そして、

当麻「お前の幻想は、俺が絶対守るよ…………。」

その言葉を聞いた瞬間、なのはの視界は涙で滲んでしまい見えなくなってしまうた。そして…………

なのは「当麻君！！！」

当麻「うおっ！？」

なのはは目の前にいるはずの当麻に思い切り抱きついた。当麻は突然のなのはの行動に驚き一瞬ぐらつくが何とか受けとめる。

なのは「うう、ぐすつ、うええええええん……………」

大切な者達を守れなかった哀しみと虚しさに苛まれ心を枯らしていた少女は、それを潤すかのように当麻の胸で泣き続けた。まるで幼い子供が泣きじゃくってるかのように……………。

そしてその後、なのはは泣き止むと顔を赤くしながらお礼と謝罪をし、自分の布団へと入った。それを見届けた当麻も自分のベッドへと向かい眠りに着いた。こうして夜は更けていった……………はずだったのだが……………

なのは「……………すう……………すう……………すう……………」

当麻「……………何故私のベッドになのはさんがいらっしやるのでせうか？……………」

当麻が違和感を感じてふと起きてみると、隣になのはが寝ていたのだ。しかも微妙に服がはだけたりしていて正直……当麻の理性が一瞬崩壊しかけた……。だが彼女のあどけない寝顔を見て当麻は自然と笑みを零した。そして、

当麻（……こいつ自身も守らないとな……）

そう心から思ったのだった……。

こうして夜は少女達の悲しみを洗い流しながら更けていく

魔王？死神？王？

いいえ、普通の女の子です！！（後書き）

はい、今回は前半ギャグで後半シリアスな恋愛にしました。なんか恋愛描写の3場面とも後半の展開が似たような感じと思った方もいると思います。すいません、これが私の限界です……………。

あとギャグも自分で書いていて微妙な気がしました。まあ、リクオが魔王化してる時点で最早いろいろと壊れてますね…………。もつと面白く、そして上手く書けるようになるべく精進していきたいです！！

次回は当麻達の言っていた“あの人”を、そして何人がキャラを出す予定です！ではまた！！

忙しい人の都合の良い日はめったにない！（前書き）

さらに長文になった上にグダグダ度合いが増しています……。前半
とかはかなり酷いwww……。。

今回はまさかの人達が登場します！！

では、本編をどうぞ！

忙しい人の都合の良い日はめったにない！

A 9:00

↓ 奴良リクオの部屋 ↓

リクオ「……ん……もう9時……か？……」

リクオは起きてすぐ、目の前の状況を見て固まった。

はやて「……すう……すう……すう……すう……」。

一、はやてが目の前で寝ている。

二、はやてを抱くような形で自分が寝ている。

三、はやての服がかなりはだけている。

リクオ（……え……ええええええええええっ！……？……？……）

ここで声を出さず、心の中で叫んだのは称賛に値するだろう。

リクオ（落ち着くんだ、僕！ 昨日のことを思い出そう。確かはやてが泣き疲れて寝ちゃったから、はやての布団まで運んで寝かせたけど服の裾を握ったまま離してくれなくて、寝言で“1人は嫌だ”って言ってたから仕方なく一緒に寝たのか、なるほど……って何やってんの僕　　！！???)

リクオはとりあえず布団から出ようとしますが、はやてが依然として服の裾を握ったまま離さない。すると、

はやて「……ん……あれ？……リクオ……君？……」

リクオ「あ……お、おはよう、はやて……」

はやて「え、あ、うん。おはようや、リクオ君……え？……」

ここでははやては自分の状態を見て硬直し、リクオに尋ねる。

はやて「な、何でリクオ君がここにいるんや!？」

リクオ「……覚えてないの？」

はやてはそれに頷く。

「……今から言うことは本当のことだからね？」

そしてリクオは夜の出来事をありのまま全て話した。それを聞いたはやては、

はやて「////////////////////」

顔を真っ赤に染め縮こまっていた。すると、

リクオ「えっとはやて……できれば手を離してくれるとありがたいんだけど……。」

はやて「え？……」

はやてが自分の手を見ると両方ともリクオの服の裾をがちりと掴んでいた。

はやて「あっ！ ぐ、ごめんな！ リクオ君。」

はやてが素早く手を離して引っ込めると、リクオはゆっくりと布団から出て起き上がった。そしてはやての顔をじっと見る。

はやて「ど、どないしたんや、急に／＼／＼／＼……。」

はやては突然リクオにじっと見られ、顔を再び赤くした。するとリクオは、

リクオ「……良かった。もう大丈夫そうだね。」

はやて「……え?……。」

リクオの言葉にはやては首を傾げた。

リクオ「昨日はやて凄く無理してるみたいだったから……少しは気持ちも落ち着いた?」

はやて「……せやね。だいぶ変わってきたわ……。せやけど、昨日はごめんなあ。迷惑掛けて……。」

リクオ「迷惑だなんて思ってないよ、はやて。僕ははやてにあんな

顔でいて欲しくなかっただけだし、それに……はやてはそういう笑顔でいる方が僕は好きだよ。」

はやて「ふえ／＼／＼／＼!?」

リクオの不意打ちとも取れる発言にはやては頬を真っ赤に染めた。

リクオ「は、はやて、大丈夫!? 顔が赤いけど……」

はやて「だ、大丈夫や／＼／＼!! ほ、ほな、早く一護君達を起こしに行くで／＼／＼!!」

リクオ「えっ!? ちょっと待ってよ! まだ僕着替えてないし!」

だがはやてはリクオの話を聞いておらずそのまま部屋を出て扉にもたれかかった。

はやて（い、今は反則やろ／＼／＼／＼……）

と、ここではやては今の自分の感情に気付いた。それは……

はやて（もしかして私……リクオ君のこと……）

“恋心”である……。

A 9：30

〔黒崎一護の部屋〕

小さいテーブルを2つ繋げたものの上には、ご飯、味噌汁、焼き魚など日本の朝食の代名詞と呼べる料理が並んでいる。

一護「うしっ！ 完了！」

フェイト「うん。でもまさか朝ごはんを交代制で作ってるとは思わなかったよ。それに一護料理上手だし。」

一護「あ？ まあ俺と当麻とリクオの当番制は随分昔から当たり前のようにやってたし、それに妹が小さい頃は俺が作るしかなかったからな。親父は家事とか全くしねえし……。つか、そういうお前も

「上手じゃねーか。」

フエイト「あ、ありがとう／＼。私昔は料理とか全然ダメだったんだけど、今の母さんが……あ、養子に引き取ってくれた人でリンデイさんっていうんだけど、その義母さんがすごく料理上手でよく教わってたんだ。」

一護「へえ、そうなのか……いい義母さんなんだな。」

フエイト「うん……そうだね……。」

しばらく続く沈黙……。すると、

フエイト「一護……昨日はありがとう……。」

一護「別に構わねえよ。あんな辛そうにしてる女を放っておくほど俺は薄情じゃねえよ。ただ……あれは勘弁して欲しかったがな……」

「……。」

フエイト「あう／＼／＼／＼……じ、じめんなさい／＼／＼……。」

「

フェイトは頬を赤くし、縮こまってしまった。一体なんのことが……それは昨日の真夜中にさかのぼる……。

昨夜

フェイトが泣き止んだ後、一護は自分のベッドに入り眠りに就こうとした。と、そこへ、

フェイト「一護、まだ起きてる？」

一護「ん？ ああ。まだ起きてるぞ。」

フェイト「ちょっと……いいかな？」

一護「……入れよ。」

するとフェイトが部屋に入ってきた。

一護「どうしたんだ？ フェイト。」

フェイト「う、うん／＼／＼……あのね／＼／＼……その／＼／……」

フェイトは頬を赤く染め、どこかソワソワしていた。そして、

フェイト「一緒に寝てもいいかな？／＼／＼……」。

一護「……………は？」

一護はフェイトの言葉を聞いて思わず間の抜けた声を出すと、

一護「はあ！？ お、お前一緒に寝るって何考えてんだよ！？ んなことできるわけ……」

フェイト「ご、ごめんね！でも1人だと……あのことが頭に浮かんで……眠れなくて……」

そう口にするフェイトは目に見えて怯えていた。まあ、目前まで迫っていた死の恐怖、大切な者を失った悲しみ、そして知らない世界に来てしまったことへの不安はそう簡単に消えることはない。そんなフェイトを追い返すことなど一護にできるわけがなかった。

一護「……それで前前の心が落ち着くって言うなら俺は何も言わねーよ。好きにしる。」

フェイト「……………うん！」

フェイトは一護の承諾に対し子供のような純粋な笑顔で応えた。そして枕を持ってくると一護の隣へと潜り込み、一護の腕に抱きついた。

一護「お、おい！？ お前何して……………」

フェイト「……………ダメ？」

一護「うっ……………」

一護が止めさせようとするが、フェイトは上目遣い＋涙目を発動した。それも無意識で……………。それを見て一護は断れるはずもなく、

一護「……………勝手にしる。」

折れるしかなかった。それを聞いて安心したのか、フェイトはもの数秒でウトウトし始め、

フェイト「ありがとう……一護……」

その眩きを最後に眠りに就いた。だが対する一護は寝ることなどできない。一護は妹と何度か寝たことはあるがそれはもう何年も前の話だし、そもそも同じ年の女子と一緒に寝たことなどない。さらにフェイトは十人中十人が美人と答えるであろうほどの美少女であり、彼女の胸囲は最早凶器に他ならない。結局一護が眠りに就いたのはその2時間後だった……。

現在

フェイトは昨夜の自分の行動を思い出し顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一護「……あいつらを呼んでくるか……」

固まっているフェイトを置いて当麻達を呼びにいこうとした時、

リクオ「おはよう、一護、フェイト。」

はやて「おはようやな。フェイトちゃん、一護君。」

フェイト「あ、おはよう、はやて、リクオ。」

一護「もう朝飯出来てるぞ。」

はやて「おっ、ホンマやね……って、フェイトちゃん、何で顔が赤いんや?」

フェイト「え／＼／＼!? な、何でもないよ／＼／＼!」

はやては見抜いた。絶対嘘であると……そして少し考え……

はやて（もしかしてフェイトちゃん……一護君のこと……）

早速真相にたどり着いた。と、ここで一護がリクオとはやてに尋ねる。

一護「そういや、当麻となのははどうした? まだ寝てんのか?」

するす、

はやて「ああ、2人ならもうすぐ来るで。」

リクオ「そ、そうだね。あははは……」

何故かリクオが苦笑いを浮かべた。と、そこへ、

なのは「お、おはよう、フェイトちゃん、一護君……」。

当麻「お、おはよう……い……ま……す……」。

どこかオドオドしているのはと何故か頭に大きなたんこぶができて
いる当麻が現れた。

フェイト「えっと……2人は一体どうしたの？」

リクオ「……実は……」

く上条当麻の部屋く

リクオ「……ねえ……はやて……」

はやて「何や………」

リクオ「これ……どう思うっ………」

はやて「いや、どっつって言われても………」

ここは上条当麻の部屋。何故ここにリクオとはやてがいるかという
と、当麻となのはを起こしに来たのだが、呼び鈴を鳴らしても全く
反応がなく鍵も開いていたので仕方なく中に入ったのだ。そして現
在リクオとはやてはある光景を目にしている。それは……

なのは「ん……ふにゅ………」

当麻に抱きつきながら幸せそうな顔で寝ているのはと、

当麻「チーンッ

何故かボロボロで眠っている当麻の姿だった……。

はやて・リクオ（な、何があったんだろう……）

2人共目の前の状況に困惑するが、とりあえずなのはの方を先に起こすことにした。

はやて「なのはちゃん、起きてーな。もう朝やで。」

なのは「んん……あと半日……すう……すう……」

はやて「起きろ　　！……！」

なのはの寝言にはやてはどこからともなくハリセンを出して、

スパアアアンツ

なのは「ふにゃああああ！……？」

なのはをひっぱたいた。突然の衝撃になのはは猫のような悲鳴を上

げる。

はやて「何やねん半日って!?!? そこは“あと5分”やる!! 何やその斜め上に行くような寝言は!?!?”

なのは「は、はやてちゃん!?!? それにリクオ君も何でここにいるの!?!?”

リクオ「いや、当麻となのはが全く起きてこないし、鍵も開いていたらから入ってきたんだよ。それよりなのは……当麻は何でそんなにポロポロなの?”

なのは「ふえ? にやつ!?!? 当麻君何でポロポロなの!?!?”

はやて「知らないんかい!?!?”

リクオ「まあまあ、とりあえず起こしたほづがいいんじゃない?!”

なのは「そ、そうだね……。当麻君、起きて。朝だよ。」

当麻「……んん……」

現在

リクオ「ってことがあったんだ……。」

一護「……………バカだろ、当麻……………」

当麻「……………不幸だ……………」

リクオ「ていうか、当麻はまずなのはに謝ったら？」

当麻「あ、ああ……………。ごめんな、なのは。」

なのは「ふえ／＼／＼／＼！？　べ、別にいいよ、当麻君／＼／＼。
むしろ、ゴニョゴニョ……………／＼／＼。」

なのはは赤面しながら何か言葉を口にしますが、途中からごもごもと話していて周りには聞き取れなかった。

はやて（まさかなのはちゃん……当麻君のことを……ってことは全員私ら誰かに惚れてしもつたんか……まあ、それぞれ違う相手やから私らで取り合いにならなくて幸いやけどな。）

はやては1人、なのはの様子を見ていろいろと考えていた。

リクオ「はやて？ どうしたの？」

はやて「えっ／＼／＼！？ ああ、いや、何でもあらへんよ／＼／＼！」

「護」ところで当麻、何でお前はポロポロだったんだ？」

当麻「わかんねえ。ただなんか一瞬ピンク色の光が見えたかと思ったら意識が途絶えちまったんだよな……何でだ？」

それを聞いたはやてとフェイトは冷や汗が止まらなかった。ピンク色の光という言葉聞いて彼女達が連想するものは1つしかない。

フェイト（なのは……）

はやて（それはあかんやろ……ていつかそもそもどうやって当麻君だけポロポロにしたんや？……）

リクオ「まあ、とりあえず朝ごはん食べない？」

「護」…それもそうだな。」

その時、

ピリリリリッ！

当麻「ん？ 俺の携帯か。」

当麻はポケットから携帯を取出す。

ピッ。

当麻「もしもし。」

土御門『よー、上ちゃん！ あの人が上ちゃん達に会う都合が着いたにやー。』

当麻「そうか。ありがとうな、土御門。」

土御門『いいってことにゃー。ああ、そうそう。そっちに遣いを送ったから、上やん以外はそいつにパパッと連れていってもらうと良いぜい。そんじゃあ、また明日会おうぜい、上やん。』

当麻「ちよつと待て！？　今なんか変な単語が聞こえた気がしたんですが!？」

ツーツ、ツーツ

通話が切れてしまったため、当麻は仕方なく携帯をポケットに戻した。

一護「今の土御門からだよな?……って、どうした?」

当麻「ああ、いや何でもない……。で、あの人の都合がついたってさ。で、なんかここに遣いを送ったらしいんだが……。」

リクオ「遣い?　遣いって一体誰が……」

と、そこに、

ヒュンッ

????「私よ。」

突然のことに全員が驚いた。当然のことである。どこからともなく部屋に1人の少女が現われたのだ。その少女は年齢は大体当麻達と同じくらいで赤い長髪を2つに分けている。そして服装は超ミニのスカートに加え、胸の部分だけを桃色の包帯のような物で隠し、その上にどこかのブレザーを羽織っているだけとかなり露出度の高い格好である。なのは、フェイト、はやてはいきなり人が現れたことへの驚きで口が塞がらないが、当麻達はそこには全く触れずその少女に話し掛ける。

当麻「結標^{むすじめ}!?!」

一護「遣いっってお前かよ!?!」

結標「あら? 何か文句でもあるのかしら?」

当麻「いや、別にねえけどよ……………」

一護「お前が土御門のパシリみたいな真似をしてるのが意外なんだよ……。」

結標「……あなた達コンクリートブロックを頭にぶつけられたい？」

リクオ「お、落ち着いて！結標さん！ 当麻もリクオも変なことを言わないでよ！」

リクオがキレかかっている結標を落ち着かせる。

結標「……はあ……まあ、いいわ。で、そこにいる3人が土御門の言ってた人達なのかしら？」

結標はなのは達3人を見てそう尋ねるが、3人は未だに固まっている。すると、

一護「ああ、なのは、フェイト、はやて。こいつは俺達の友人で同じ学校の同級生の結標淡希だ。」

結標「まあ会うこともあまり無いかもしれないけど、よろしく頼むわ。」

なのは「あ、私高町なのはって言います。」

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです。」

はやて「八神はやてや。」

なのは「あの……淡希ちゃん……でいいかな？」

なのはの言葉に結標は思わず豆鉄砲を食らったような顔をした。

結標「あなた……よく初対面の相手に“ちゃん”付けなんかできるわね………まあいいわ。で、何かしら？」

なのは「えっと……さっきのは一体なんなんですか？」

結標「さっきの？」

はやて「いきなり現れたことや。何やあれ？ あんた何者や？」

結標「私は座標移動↑ウボイントつていう空間移動系の能力者よ。」

なのは「ムーヴ?」

フェイト「ポイント?」

はやて「それに空間移動系の能力者ってどういうことや?」

さっぱりわからないといった表情のなのは達を見て、結標は当麻達に尋ねる。

結標「あなた達、もしかしてこの3人に学園都市について何も話してないの?」

当麻「あっ……」

一護「そっいや、何も話してないな……」。

リクオ「まあ昨日はいろいろあったせいで、学園都市の話をするほど精神的に余裕がなかったからね。」

結標「……はあ……もういいわ。どうせその辺についてもあの年から話があるだろうし。とりあえず行きましょう。」

当麻「えっ！？まさか今からか！？まだ朝飯食ってないんだけど……」

結標「あの人が忙しいのはあなたがよく知ってるはずだけど？」

一護「当麻、あきらめろ。」

当麻「はあ……不幸だ……」。

結標「じゃあさっさと行くわよ。あ、ちなみに上条君は自力で来なさいよ。」

当麻「……はい？」

はやて「え？それってどついつ……」

だがはやてが言い切る前に当麻以外は全員部屋から消えた。そして

……

なのは「にゃっ!?!?」

フェイト「きゃっ!?!?」

はやて「うひゃっ!?!?」

3人は一瞬浮遊感を感じたが急にそれが無くなり床に尻餅を付く形になった。

一護「お前ら、大丈夫か?」

リクオ「まあ初めてなら当然こうなるよね。」

なのは「うっっ、一体何が起こっ……た……の?……え?……」

フェイト「……」

はやて「一体どうなってるんや?……」

なのは達は困惑した。何故ならそこは先ほどまでいた一護の部屋ではなく、少し広めで洋風な装飾が施されたホールのような場所だっ

ただから。

リクオ「これが結標さんの能力、“座標移動”^{4↑ヴポイント}、簡単に言うと物体を指定した場所に瞬間移動させる能力だよ。」

はやて「瞬間移動なんて……そんなことが有り得るんか……。」

???「それを可能にする人間がいるのが、ここ“学園都市”なんです。」

突如聞こえてきた声に驚き振り向くと、そこには一護達と同じくらいの年でベージュのスーツを着こなしている爽やかそうな少年がいた。

リクオ「久しぶりだね、海原君。」

海原「そうですね、奴良君。黒崎君もお久しぶりです。」

一護「お前、相変わらずその顔なんだな。」

海原「ええ。この顔は結構気に入っていますから。おっと、そうい

えはまだそちらの3人に自己紹介をしていませんでしたね。初めまして、僕は海原光貴と言います。まあ黒崎君達の知り合いとでも思っておいて下さい。」

なのは「あ、あの、私は……」

海原「ああ、あなた方の名前は既に知ってますよ。高町なのはさん、フェイト・T・ハラウンさん、八神はやてさん。」

フェイト「え？ どうして？……」

海原「ああ、土御門から聞いていますから。彼と僕、そしてそこにいる結標さんとは一種のビジネス仲間のような者でしてね。」

はやて「そ、そうなんか……」

なのは達は思った。“この人とはなんか話しづらい”と……。

結標「さて、紹介も済んだんだからさっさとあの人のところに案内した方がいいんじゃないかしら？」

海原「そうですね。では皆さん、僕に付いてきて下さい。」

そう言つて海原が行こうとした時、なのはが気付いた。

なのは「ねえ、当麻君は？」

フェイト「あれ？ いない？」

はやて「何やて!？」

一護「ああ、別に気にしなくていいぞ。」

なのは「？ どうして?？」

リクオ「いや、当麻は無理なんだよ。」

フェイト「何が?？」

一護「あいつにはムーヴポイントが…というか能力自体が効かないんだよ。」

はやて「な！？　じゃあ1人だけ置いてきぼりにしてきたんかいな
！？」

海原「大丈夫ですよ。しばらくすれば彼も着くでしょうから。では
こちらへ。」

そう言つて海原は先導し始め、一護やリクオ、結標もそれに付いて
いく。なのはやフェイト、はやてはイマイチ納得のいかないまま、
それに付いていった。長い廊下に出てひたすら進んでいくと、突き
当たりに立派な両扉があつた。

コンコンッ

????「どうぞ。」

海原「失礼します。」

海原がドアをノックすると中から年配の女性の声が聞こえてきた。
そして許しを受け、海原がドアを開け中に入り、それに一護達も続
いて入っていく。

海原「上条君以外の5人を連れてきました。」

「……」苦勞様でした。結標さん、海原君。」

100人は入れるのではないかというほどの広い部屋にある高級そうな執務机には1人の、見た目どこにでもいそうな初老の女性が座っていた。すると、

「……」久しぶりですね。黒崎一護君、奴良リクオ君。」

一護「あんたも相変わらずみたいだな。」

「……」あなた達も元気そうですね。それと進級おめでとうござい
ます。もう高校2年でしたか？」

リクオ「はい。まあ、当麻は進級できるか微妙でしたけど、何とか
進級できました。」

「……」ふふ、彼らしいですね……。さて、その上条当麻君はいま
せんが話を始めても大丈夫でしょう。その前にそこにいるあなた方
3人に自己紹介をしなければなりませんね……。」

すると、初老の女性はなのは達の方を見た。そして……

???。「初めまして、高町なのはさん、フェイト・T・ハラオウンさん、八神はやてさん。私は学園都市を統括する最高機関“統括理事會”の理事長を務めている親船おやふねもなか最中といたします。」

END

忙しい人の都合の良い日はめったにない！（後書き）

どうも、黒狼です。

とりあえずすみません！ 話が全然進みませんでした。前半部分に力過ぎすぎた結果です。本当はさっさと話を進めたかったんですが、そうするとシリアスのみになってしまいそうで……。一応これギヤグ&ほのぼのがメインと謳ってるのでそれはまずいと思って書いたのですが、グダグダに拍車がかかりました、はい……………。

さて今回はまさかのグループのお二方を出しました。海原はどうしようかと思ったんですけど、出さないのもかわいそうだなと思って出演させました。あ、あの白い人は当然いずれ出ますよ。禁書目録であの人が出ないとか無いですからね。

そして“あの人”の正体は統括理事会きつての善人、親船最中さんでした。あと理事長が親船さんということで気付いた方も多いと思います。アレイスターさんは出ない方向で行くと思います。アレイスターさんが理事長だとキャラ崩壊でもさせない限り、なんかシリアス方面にしか行かなそうなので……。

めちゃくちゃ長くなってしまいました。すみません。

ではまた次回！

体の変化なんて意外と気付かない!! (前書き)

投稿するたびにグダグダが加速していつてる気がしてきた……。

今回でようやくシリアスモードが終わります!! 文章は短めです!

ではスタート!!

体の変化なんて意外と気付かない！！

親船「さて、自己紹介も済みましたしそろそろ……」

結標「ちょっといいかしら？」

親船「あら、どうしましたか？ 結標さん。」

結標「実はこの3人、学園都市について全くと言っていいほど知らないのよ。もうとっくに話してあると思っていたのだけれど……」

結標はそう言いながら一護とリクオを見る。

リクオ「す、すみません……。」

一護「だから、学園都市について説明する余裕なんてなかったんだし、第一俺達はともかく、本人達がかなり困惑してたんだしよ……。」

「

親船「まあ、この街について話すのは少々骨が折れますからね。なら、私が説明しましょう。」

そして親船はなのは達にこの街について話しだす。

親船「ここ学園都市は高度な教育と研究を目的として日本政府に設立された特別行政区です。そのためこの街の人口約230万人のうち7割の160万人が学生です。つまりこの街は学生によって成り立っていると言っても過言ではないのです。」

フェイト「人口の7割が学生って……」

はやて「なんちゅう街や……」

親船「ですがこの学園都市設立にはもう1つの目的があります。」

なのは「もう1つの…目的?…」

親船「それは、特殊な能力を持った子供達の保護です。」

なのは・フエイト・はやて「っ!?!」

親船「ありえない力を持った人というのは少なくない。それはあなた達3人にも言えるでしょう?」

なのは達は押し黙るしかなかった。実際に自分たちは他人から見ればあり得ない力を持ってしまっているのだから……。

親船「そういった子供達を受け入れ社会に適應できるようにすることも、ここ学園都市設立の大きな理由です。そしてその一環としてそういった特別な生徒と普通の生徒を混合で編成している特別学校があります。それが……」

「自由学園……ここ学園都市で最も有名な学校で、俺達の通ってい

る場所だ。」

なのは達が突如聞こえてきた声の方を見ると……

なのは、フェイト、はやて「当麻（君）……！」

入り口に当麻が立っていた。

親船「お久しぶりですね、上条当麻君。」

当麻「あんたもな、親船さん。」

海原「久しぶりですね、上条さん。」

上条「海原か。そうだな、ここに来たのも大分前だったし……」

と、ニニジ、

親船「さてと……では彼も来たことですし、本題を話すとしまじょうか。」

親船が改まった様子で話し始めた。そして……

親船「高町なのはさん、フェイト・テストロッサ・ハラウンさん、八神はやてさん。あなた方3人には高校生として上条君達と共に自由学園に通ってもらいます。」

なのは・フェイト・はやて「……え?……」

突然のことになのは達は困惑する。

なのは「私達が……高校に?」

フェイト「でも私達もう高校生の年じゃ……」

リクオ「そういえば、なのは達って年いくつなの？」

はやて「え？ 19やけど。」

一護「……………は？……」

当麻「マジでせうか？……」

はやて「な、なんや？ そんなに意外やったんか？」

一護「いや、だってよ……」

リクオ「はやて達見た目150cmありか無いかくらいだから僕達

より年下か、せいぜい同い年くらいだと思ってただけ……。」「

なのは、フェイト、はやて「え？……」

リクオの言葉を聞いてなのは達はきよとした表情になった。するとはやてが何かに気付き、

はやて「っ！　なのはちゃん、フェイトちゃん、ちょっと失礼するでー！」

ムニッ、ムニッ

なのは・フェイト

「ふえ／＼／＼／＼／＼／＼！？」

なのはとフェイトの胸を揉み始めた。突然のはやての行動になのはとフェイトは顔を真っ赤にして狼狽えてしまい、当麻や一護、リクオも目の前の光景を見て顔を赤くし、無意識で後ろを向いた。する

とはやては揉むのを止め、

はやて「小さなってる……………」。

なのは・フエイト

「え?……………」

二人ははやての言っていることの意味がわからず首を傾げる。

はやて「良く聞いてや、二人共。私ら恐らく、体が少し退化しとる。それも多分2年前、つまり17の時の身体になつとるで。」

なのは「……………身体が縮んでるってこと?」

はやて「せせ。」

フェイト「た、確かになんか体にどこか違和感を感じるような気がしたけど……」

と、ニジビ、

結標「それはちょうどいいんじゃないかしら。」

なのは・フェイト・はやて「え？……」

結標の言葉になのは達はきよとんとする。

親船「そうですね。肉体年齢が一緒なら信用度も上がりますし……」

なのは「あの、一体どういうことですか？」

親船「戸籍ですよ。あなた方3人がこの世界の人間でない以上、戸

籍を偽るしかない。あなたが肉体的に高校2年生の体と同じならば、その戸籍の信用度も上がるという意味です。まあ、身体の成長は人それぞれですからそれほど重要ではないでしょうが……」

フェイト「で、でもそれって犯罪じゃ……」

親船「あら？　それがどうしたんです？」

フェイト「え……」

親船「あなた方がこの街で生きていくにはその方法しかないんですよ？　それをわかっていて上条君達は私に頼んできたのですから……それともあなたは彼らの勇気ある好意を無駄にするとでも？」

フェイト「そ、それは……」

と、そこに、

一護「フェイト。」

フェイト「一護……………」

一護がフェイトに語り掛ける。

一護「俺達だってこれが犯罪であることくらい十分わかってる。けどよ、それで誰かを救えるのなら俺は喜んで破るぜ。誰かを救えない方が俺にはよっぽど辛いから……………」

一護の切実な思いにフェイトの目が潤む。

フェイト「ありがとう……………一護……………」

親船「黒崎君の言う通りですよ。それにあなた達、高校には通っていませんか？」

なのは「あ、いえ、私達中卒なので……」

親船「なら、尚更通うべきですね。高校生活は最も青春を送れる時ですよ。それにあなた方も女性なので、恋愛の1つや2つはしておくべきなのでは？」

なのは・フエイト・はやて「えっ！？／／／／／／／」

親船の思わぬ一言になのは達は赤面する。そして3人を見て、

親船「おやまあ、どうやらいらぬお世話だったようですな。まあ、いいでしょう。とにかく編入は明後日月曜日。学校側にはすでに話を通してありますから心配はいりませんよ。」

はやて「え、ええと、ホンマすみません。えらい迷惑かけてしもうて……。」

親船「別に謝らなくても構いませんよ。私は元々子供を守るためにこの椅子に座っているのですし、何より上条君達には大きな借りがありますからこのくらいのことには協力しますよ。」

その後、当麻と一護、リクオ達3人は親船さんと話があると言ったため、なのは達は結標や海原と共に先に部屋を出ていった。そしてしばらくの間沈黙が続くと、当麻が口を開いた。

当麻「悪いな、親船さん。この世界にいない人間の戸籍を作るなんて、そう簡単なことじゃないだろ？」

親船「まあ、そうですね。ですがあなた方3人には返しきれない恩がありますから……私にとっても……この学園都市にとっても……」。この1年間は、あなた達にとって退屈でしたか？」

一護「退屈か……退屈なんかしないっすよ……。むしろこうあるべきだったんだ、あの時も……。」

リクオ「確かに今までの経験は僕達にとっては大事なことです。でも同時に失ったものもたくさんありました……二度と戻らないもの

も……たくさん……。」

親船「……あなた方が高町さん達にここまでするのは過去の出来事ゆえ……ですか？……」

「護」……あいつらがここに来た経緯……土御門から聞いてんだろ？」

親船「……ええ……世界の闇というのは深いものです……かつてのこの街のように……。あの子達はその世界で生きていくにはあまりにも純粹過ぎたのでしょう。だから切り捨てられてしまった……。この世界もあまり変わりはありませんよ……その中であの子達が生きていけると思えますか？」

親船が当麻達に尋ねると当麻は笑みを浮かべ、

当麻「この世界があいつらを切り捨てようとした時は、俺達が最後まであいつらに付き合うよ。約束もしちまったしな……。それにこの街には良い人も多い。あんたも含めてな……」

親船「……私は善人などではないですよ？ 彼女達にも監視と調査が行わざるを得ませんし、場合によってはあなた方と対立する可能性も否定できません。」

一護「あの時理事会の中で最後までこの街に齒向かい続けたあんたが善人じゃなかったら、世の中のお偉いさんは皆悪人だよ。」

リクオ「それに監視と調査だけで済ませてくれてる時点で十分です。仮にもし親船さんが僕達と対立したとしても、その時は余程の理由があると思えないですしね……。」

親船「……はあ……あなた方のお人好しはいつも私の想像を遥かに凌駕しますね。まあ、だからこそ救世主となり得たのでしょうか……。」

当麻「救世主なんて言葉、俺達に似合わねえよ。俺たちはただの高校生……それで十分だ。じゃあな、親船さん。」

そして当麻達は部屋を後にした……。部屋にいるのは親船最中、た

だ1人である。

親船「……謙遜する必要などないのですけどね。あなた方がこの街を……いえ、この世界を救ったのは事実なのですから……。しかし、彼らはどうやら人からの好意には疎いようですね。少し意外でした……。」

親船は1人そんなことを呟いていた。ちなみにその後すぐ、部屋を出た当麻達がくしゃみをしたのは言うまでもない……。

END

体の変化なんて意外と気付かない！！（後書き）

どうも、黒狼です！

シリアス編をようやく終わらせました！

まあ、このままグダグダのシリアスを続けるよりもキャラを増やしてサツと学園編に入って、ギャグでグダグダしてた方がいいと思っただけなんですけど……。

それにしても親船さんをものすごく善人っぽくかいてしまったのですが、親船さんはあくまでも統括理事会の中での善人でしたから一般的に見るとどの程度の善人なのかわからないんですよね。原作でもかなりの策略家だったようです……。ひよっとしたらいずれその一面が現れるかもしれません。

次回からようやくキャラが多数出せそうです！ 何のアニメのどのキャラが出るかは楽しみに！！

ではまた！！

主人公・ヒロイン紹介&設定集（ネタバレ注意！！）（前書き）

小説のキーワードに“最強チート化”って書きましたけど今のところはそこまでチート化されてませんが、はつきり言って色々大きく変わってます。特に上条さんと一護が……………。

あと設定もオリジナルですが「何だこれは？」と思うところがあったり矛盾していたりするところがあるかもしれないのでご容赦下さい。

主人公・ヒロイン紹介&設定集(ネタバレ注意!!!)

主人公

上条当麻

身長 172

能力 幻想殺し

????

出演作品

とある魔術の禁書目録

V 阿部敦

(バクマンの真城最高、BLOOD Cの鞘総逸樹 etc.)

本作の主人公No.1。自由学園高等部2年生。黒髪ツンツン頭が最大の特徴で、自身の能力“幻想殺し”のせいで毎度不幸な目にあ

っていたり、恋愛に関しては鈍感だったりなど原作通りの人物像である。

ただ学校でのテストの成績自体は中の下とそこまで悪くはないのだが、不幸で課題を提出できなくて補習をしよっちゅう受けさせられたり、友人達とはか騒ぎすることが多いためお馴染み“3バカデルタフォース”のリーダー角となっている。その一方で小中高の生徒に幅広く知られていて、ある意味皆から慕われている（主に不幸の避雷針としてだが……）。

学園都市には小学生の時から住んでいる。一護やリクオとは中部で知り合いその頃から寮の部屋も隣であるため、今ではお互いのこともよくわかるほどの大親友である。

原作ではスキルアウト（無能力の不良）2、3人相手なら勝てる程度の喧嘩の強さだったが、現在では2、30人相手でも1人で勝てるほどの強さになっている。

能力はあらゆる異能を打ち消す“幻想殺し（イメージブレイカー）”。だが右手にしかその効果はなく、自分の意志に関係なく壊してしまうため万能とは言い難い。隠された力があるらしいがそれはまだ不明。

高校に入つてすぐライオット・ジャッジメント特別風紀委員になり銃刀携帯特別免許を取得しているため、常に懐に“スタームルガー・スーパードラックホーク”を改造した愛銃“スタームルガー・ブラックホーク0”を携帯している。その銃の腕前は米軍の特殊部隊も真つ青になるほどらしいのだが、一体どんな風にして鍛えたのかは謎。本人曰く“この世とあの世の区別がつかなくなるほどキツかった”そうだ。

身長 181

能力 死神化

???

出演作品 Bleach

V 森田一成

(ガンダムSEEDdestinyのアウル・ニード、ONEPIECEの不死鳥のマルコ、戦国SRの前田慶次etc.)

本作の主人公No.2。自由学園高等部2年。容姿は死神代行消失編の姿をイメージ。オレンジ色の髪は生まれつきの物である。

性格は見た目とは真逆で困ってる人を放っておけない優しい性格である。だが恋愛に関しては疎い。

成績もかなり優秀で学年順位もトップ10に入るほど。加えて運動神経も抜群に良いが帰宅部であるため様々な部活から助っ人として勧誘されることが多いため学園内ではとても慕われている。また

その容姿から不良に絡まれることが多いため、喧嘩は滅法強く当麻よりも上である。

特異能力はもちろん死神化で、それによって出現する斬魄刀は“斬月”。だが原作と違い霊魂の管理や虚ホロウの駆除といったことはしない。そのため一護はA級霊体でもないし幽霊も見えたりしない。そもそも死神という存在は無く、あくまで能力を発動した姿のことを“死神”と呼んでいる（詳しい説明はまた別の機会で書きます！すみません！）

当然卍解や虚化も会得している。また原作では一護は細かい霊子操作が苦手な鬼道の才能は皆無だったが、こちらでは努力の末、80番代までの鬼道を扱えるようになった他、最近では独自の鬼道も編み出すようになっていく。また苦手ではあるが治療系の鬼道も使える。（ちなみになのは達の怪我は一護の鬼道で治してます。）

学園都市に来たのは中学の時で、その後すぐ特別風紀委員となっている。

実は学生以外にももう1つの顔があるらしく、当麻とリクオ他、数人の人間がその事実を知っている。

奴良リクオ

身長 176

能力 魑魅魍魎

(夜リクオ化)

???

出演作品

ぬらりひよんの孫

V 福山潤

(コードギアスのルルーシュ・ランペルージ、武装錬金の武藤カズキ、青のエクソシストの奥村雪男、マクロスFのルカ・アンジェロ I 二 e t c .)

主人公No.3。自由学園高等部2年。茶色い髪に丸メガネが特徴で、性格は非常に温厚で誰にでも優しく接する。学校での成績は学年でベスト3を争うほど高い上に、運動神経も一護並みの良さがある。加えて中高両方で副生徒会長を歴任していたため学園での知名度は1、2を争うほど高くその人柄と合わせてとても慕われている。

性格上争いを全くしないが、本気でキレた時には当麻や一護も上回るほど喧嘩が強くて怖い。

能力は魑魅魍魎、つまり原作の夜リクオ化であるがここでは自分の意志で昼夜関係なく姿を変えることができる。また原作同様夜リ

クオオ時の記憶はきちんと残っている。夜リクオの性格は原作通り大胆かつ荒々しく、口調も変わる。ちなみに姿がどちらでも恋愛に関して物凄く疎い。

一護同様、中学の時に学園都市に来てすぐ特別風紀委員となり銃刀携帯特別免許を取得しているため、背中に長ドスを隠し持つっており、その腕前は達人クラスである。

もう一つの顔は大妖怪“ぬらりひょん”の孫で妖怪と人間のクオオター、そして妖怪任侠一家“奴良組”の若頭である。このことを知ってるのは当麻や一護を始め極一部の人間しか知らない。

本作において原作と最も容姿が変わっているキャラである。ちなみに原作当時は中学一年で身長も148しかなかったが、現在ではかなり大人びている。

ヒロイン

高町なのは

年齢 19 17

身長 158 148

出演作品

魔法少女リリカルなのは

V 田村ゆかり

(シーキューブのフィア・インキューブ、ひぐらしのなく頃にの古手梨花、銀魂の花野アナ e t c .)

ヒロインNo.1。平行世界から飛ばされた少女の1人で、栗色髪のポニーテールが特徴。元いた世界で殺されかけていた時に謎の現象で学園都市に飛ばされ、傷だらけで倒れていたところを当麻達に助けられた。そして統括理事長の親船の計らいで自由学園高等部2年として通うこととなった。

性格は原作同様謙虚で明るく誰にでも優しいが、一度怒りに触れると白き魔王が降臨する……。また勉強は相変わらず理数系が得意で文系が微妙。そして運動神経もある程度向上しているとはいえやはり体育は苦手である。

初日の夜の一件から当麻に対して好意を抱いている。

能力はもちろんレイジングハートを用いた中遠距離魔法であり、破壊力は全能力の中でもトップクラスである。

フェイト・T・ハラオウン
テスタロッサ

年齢 19 17

身長 163 153

出演作品 魔法少女リリカルなのは

V 水樹奈々

(NARUTOの日向ヒナタ、テイルズオブシンフォニアのコレット・ブルーネル、DOG DAYSのリコッタ・エルマール e t c .
)

ヒロインNo.2。平行世界から飛ばされた少女の1人。金色の長

い髪と赤い瞳が特徴。なのは同様傷だらけで倒れていたところを護衛に助けられ親船の計らいで自由学園高等部2年として通うことになった。

性格は穏やかで誰に対しても優しく接するが少々天然だったり世話焼きなところもある。なのはやはやてとは10年来の親友でとても大切に思っている。

勉強はなのは同様理数系が得意だが文系もそこそこ高く英語はできる。また運動神経もかなり良い。

初日の夜のことから一護に対して好意を抱いている。

能力はインテリジェントデバイス“バルディッシュ”を用いた近距離魔法。スピードに関してはトップクラスの速さを持つ。

八神はやて

年齢 19 17

身長 150 145

出演作品 魔法少女リリカルなのは

V 植田佳奈

(Fate・stay nightの遠坂凜、咲の宮永咲、テイルズ
オブグレイセスのパスカルなど etc)

平行世界から飛ばされた少女の1人。茶髪のショートカットと柔らかい関西弁が特徴。なのはやフェイト同様傷だらけで倒れていたところをリクオ達に助けられ、親船の計らいで自由学園高等部2年として通うことになった。

前向きで優しい性格だが、元いた世界での境遇や立場から辛いことなどを1人で抱え込むことがある(なのはやフェイトもそこまでではないがある)。

勉強はなのはやフェイトとは違い全教科において高得点を獲る。

だが幼い頃足が不自由であったため体育はあまり得意ではない様子。

初日の夜のことからリクオに対して好意を抱いている。

能力はストレージデバイス“シュベルトクロイツ”と魔導書型デバイス“夜天の魔導書”を用いた遠距離魔法。前線で戦うより後方で支援砲撃をするのを得意としているので単独戦闘は不得手のようだが、それでも戦闘力は十分高い。

設定

学園都市

日本政府によって設立された教育研究機関。特別行政自治区に指定され、東京、埼玉、山梨の3県にまたがっている上に面積は東京の3分の1ほどもある。また科学技術に関しては世界一と言っても過言ではないなど、あらゆる点において“とある魔術の禁書目録”の学園都市と類似しているが決定的な違いとして超能力研究は行っていない。また人口の約七割が学生であるため都市内には多数の学校がある。

特別風紀委員

(ライオット・ジャッジメント)

名称に“特別”とあるが実質有事の際に動く臨時の風紀委員。ジャッジメント 普通の風紀委員のように各支部に別れていたりするわけでもなく、付近で事件が起こった際に風紀委員の協力をしたり、時に単独で対処に

当たったりすることもある。だが臨時とはいえ各支部の管轄問題などを抱える風紀委員よりも応用が利くため、資格を取得するのは風紀委員と同じかそれ以上に難しいらしい。また風紀委員と同様に高能力者である人間が多い。

銃刀携帯特別免許

警察庁公認の学園都市内にのみ有効な免許。この資格を持つ人間は学園都市内での銃火器や刀剣などを常時携帯が認められる。資格保有者は風紀委員や特別風紀委員、そして警備員アンチスキルに所属している人間が大概だが、中には統括理事長の親船の承認の下この資格を保有している人間も少なくない。またこれはあくまでも“物体としての銃刀”の所持を規制するものであり、斬魄刀などの能力によって現れる武器類は対象外とされているため、この免許の存在は度々疑問視されている。

主人公・ヒロイン紹介&設定集(ネタバレ注意!!!)(後書き)

どうも！ 黒狼です！

主人公とヒロイン紹介&設定集を載せました。

ですが色々と無理があると自分でも思いながら書いてました。上条さんが拳銃使ったり一護が鬼道を使えたりなんて想像付かないですよ。 原作を愚弄してるとも言わざるを得ませんが、とりあえずこれから先はキャラ崩壊だけはなるべく避けたいと思いました。特に女子の！ これから当然女子キャラ増えますからそれだけは何としてもキャラを守っていこうと思います！

さて、なのは達を退化させたのですが「何でなのはとフェイトは10センチも縮んでいるのにはやては何故5センチしか縮んでないの？」という疑問を持った人もいるでしょう。結論から言って「はやての身長そこまで縮めたら小学生になっちまうじゃねーか！」と思ったので5センチに自重しました。まあ十分低いんですけどね。考えてみたら10センチも縮めた意味あったのか？

長文になってしまいました。すみません！

今度こそ次回から多数キャラを出演させるつもりです！
ではま

た
!

普通の人間なんて世の中早々いません!! (前書き)

はい、今回からほのぼのとした話に……なってると思います。多分……。

あと後書きでの予告通り新キャラも数名出ます!! でも出すので精一杯だったため、やっぱりグダグダです!

そして今回から & Dを以下に変えます!!

“ Z ” } S D }
(Bleach今期 テーマ)

D “ 星空のスピカ ” } 田村ゆかり } (リリカルなのはstr
ikers D1)

では、本編をどうぞ!!

普通の人間なんて世の中早々いません!!

学園都市統括理事会理事長の親船最中との謁見から1日が過ぎ、今日は日曜日。学校は明日からであるため、今日は一体どうしようかと悩みながら当麻、一護、リクオ、なのは、フェイト、はやてはリクオの部屋で朝ごはんを食べていた。すると、

はやて「なあ、リクオ君。」

リクオ「どうしたの？ はやて。」

はやて「バイトできる場所あらへん？」

リクオ「？ バイト？ うーん……」

はやてが突如そんな話を持ち出してきた。リクオは思わぬ質問に言

葉をつまらせる。

リクオ「僕達も最近までやってたんだけど、学園都市って学生が多いから当然バイトをしようとする人も多くて、最近中々募集してる場所少ないんだよね。当麻や一護はどこか知らない？」

当麻「いや、思いつかないな。」

一護「俺もだな。でもどうしたんだよ？ いきなりバイトしたいだなんて……」

一護がもつともな疑問を投げ掛けた。

はやて「だって私らここに泊めさせてもらってる身やで？ それなのに何もしないなんてありえへんやろ？」

フェイト「だからどこかのアルバイトでお金を稼いでせめて衣食くらいは自分で調達しないと……」

なのは「自分のことは自分で何とかしなきゃね。」

実は当麻がなのは達の住む部屋について学園都市の諸事情に詳しい土御門に連絡してみると、近年の学園都市の学生の増加によって部屋がどこも満室だからしばらくは当麻達の部屋に泊めてやってくれと言われたのだ。さすがに世話になってばかりではいけないとなのは達は感じ、幸い戸籍はもう登録済みであるため今からバイトをして当麻達に負担をかけないようにしよう決めていたのだ。するとそんななのは達の答えを聞いた当麻は、

当麻「うう……グスッ……」

なのは「と、当麻君！？ 何で泣いてるの!？」

当麻が大粒の涙を流しながら泣き始め、なのはがあまりのことに狼狽える。

当麻「か、上条さんは……あなた達の心構えを聞いて……グスッ……」

感動したのでありますよ……。」

なのは「え？……。」

なのは思わず首を傾げる。すると一護とリクオが説明し始めた。

リクオ「ええと、実はね……中学の頃当麻の部屋に居候がいたんだけど……。」

一護「そいつが家事スキル0で大食いのグータラシスターだったんだよ。」

リクオ「でも全然悪い子じゃなかったし、僕達も何度もお世話になってたから追い出すなんてこともできるはずなかったから……。」

一護「で、当麻はそいつの面倒を見ていたから、その費用で毎月の仕送りが半月残して尽きたことも何度もあったからな……。」

それを聞いたなのは達3人は理解した。当麻はものすごく苦労してきたんだなあ」と……。すると一護があることを思いついた。

一護「なあ、それならバイト探しのついでになのは達に街を案内してやんねえか？」

リクオ「あ、そうだね。ここで暮らしていくなら街のことを知らない。はやて達もそれでいいかな？」

はやて「も、もちろんやけど……ええんか？ リクオ君達にも予定があるんじゃない……」

一護「心配すんな。元々何も予定がなかったから、むしろ丁度いいさ。当麻も行くだろ？」

当麻「当たり前だ！ なのは達のバイト先を絶対に見つけてやるぜ！」

こうして当麻達はなのは達のバイト探しと街案内をすることになったのだった……………。

A 10:30

学園都市内にある公園は今日が日曜ということもあって多くの人で賑わっていた。そんな中、人々の視線が一点に向けられる。その先にいたのは……………

なのは「な、なんか私たち、皆から見られてないかな？」

フェイト「そ、そうだね。ちょっと落ち着かないかも。」

はやて「私ら、何か変なところでもあるんかいな？」

一護「……自覚なしかよ……。」

リクオ「あはは……。」

首を傾げるなのは達を見て一護は若干呆れ、リクオは苦笑いを浮かべた。周りから見て、なのは達はどうか考えても遜色ない容姿を持った美少女である。そんな女子が3人も、しかも男子達と歩いていれば目を引くのは当然なのだ。まあもつとも、一護やリクオもカッコいい部類に入る人間であり当麻も悪い方ではないのでそつちも人目を引く要因の1つなのだが……。と、ここでののはが、

なのは「そういえば当麻君。自由学園に通ってるってことは当麻君達も何か不思議な力を持つてるの？」

当麻「ん？ ああ。俺達もいわゆる特異能力者だからな。」

リクオ「はやては一度僕の能力を見てるよね？」

はやて「え？ あ、あれかいな。あの時はホンマにビックリしたわ
……。」

当麻「リクオ、なのはとフェイトにも一回あの姿を見せた方が良く
んじゃないか？ じゃないと混乱するだろ？」

なのは・フェイト

「え？」

リクオ「あ、そうだね。」

リクオはそう言うと言を閉じて集中し始めた。すると周りから煙が
立ちこめリクオの姿を隠した。その光景に周りの人間も驚く。そし
てそこから現れたのは……

なのは・フェイト

「……………誰？」

はやて「リクオ君や。」

夜リクオ「よう。この姿でお前らに会うのは初めてだな。」

フェイト「えっ！？ 本当にリクオなの！？」

なのは「ふええええ！？ だ、だって全然姿も喋り方も違うし！
ふええええ！？」

当麻「お、落ち着け、なのは、フェイト！ これはな……」

そして当麻はリクオの能力“魑魅魍魎”について説明した。

なのは「夜のリクオ君……」

フェイト「姿がまるっきり変わるなんて凄いね。」

夜リクオ「まあ最初は戸惑ったけどよ。もう慣れたぜ、この姿にも……って、おい、はやて。なに人の顔見ながらポーツとしてんだ？」

はやて「ふえ／＼／＼！？ な、なんでもないで／＼／＼！」

はやては頬を赤くしながらリクオにそう答えた。

リクオ「っーか俺なんかよりも当麻と一護の能力の方がよっぽども変わってる気がするけどな。」

と、その時、

フェイト「ねえ、あの人だからは何んだろっ？」

当麻達がフェイトの指差した方を見ると、

不良 「ねえ、君、可愛いね。」

不良 「日曜なのに制服着てるんだね？ 気に入ってるの？」

不良 「今から俺たちと遊びに行かない？ まあいつ帰れるかはわかんないけどね。ヒヤハハハッ！」

見るからに不良ですと言ってるような男数人と……

「……………」

何も言わずただ黙っている短い茶髪の少女がいた。

なのは「あ、あれって女の子が不良の人達に絡まれてるよね!？」

はやて「あかん！ 早く助けへんと！」

そう言うてはやてがそこに近づこうとするが、

一護「ああ……やめといた方がいいぞ、はやて。」

はやて「な、なんで止めるんや！？ 一護君！ 女の子一人にあんな大勢で囲んでるなんてヤバイやろ！！！」

一護「あれが普通の女の子だったらな……。」

一護は冷や汗をかきながらそう言った。すると、

バリバリバリバリッ！！！！

不良一同「ギャアアアアアアツ!!!!????」

突如不良達を凄まじい電撃が襲い黒焦げにした。

????「はぁ……本当にどうしてこういうバカは消えないのかしら……。」

そしてその中心にいた少女は何事もなかったかのようにその場に立っている。その少女は上は肌色の長袖のブレザー、下はグレーのプリーツスカートの制服を着ている。そしてその少女を見た当麻が口を開いた。

当麻「み、御坂……。」

????「あ、あんたなんでここに!?!」

当麻「……はぁ……不幸だ……。」

なのは「えっと、この子は当麻君達の知り合いなの？」

一護「あ、ああ……。こいつは御坂美琴。自由学園高等部1年で俺達の後輩だ。」

リクオ「久しぶり、御坂さん。」

リクオさん……。いつの間に元の姿に戻ったんですか……。

美琴「ああ、あんた達も一緒なのね……。って、そっちの3人は誰よ？」

美琴はなのは達の存在に気付くとそつ尋ねる。

一護「ああ、こいつらは明日から俺らの同級生になる奴だ。」

なのは「あ、私は高町なのはっていつの。よろしくね！ 美琴ちゃん！」

フェイト「私はフェイト・テストロッサ・ハラウン。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな！」

美琴「あ、ど、どうも。御坂美琴です／＼／＼／＼。」

一護の“同級生”という言葉から自分の先輩になる人物であることを悟り、さらに初対面にも関わらずいきなり“ちゃん”付けで呼ばれたため、美琴はやや恥ずかしそうに挨拶した。

当麻「にしてもお前これ……やりすぎじゃねーのか？」

美琴の周りには依然として不良だったものが黒焦げで倒れていた。中には漫画の如くアフロヘアーになっている者もいる……。

美琴「こつちに非があるんだから自業自得でしょ？」

高々10万ボルトだから気絶と少しの火傷くらいよ。」

当麻「いや、一般人相手にそれは十分やりすぎだろ!?!」

と、ここでフェイトが口を開く。

フェイト「あの、ひょっとして美琴も何か力を持つてるの?」

リクオ「うん、そうだよ。御坂さんは“電撃使い（エレクトロマス
ター）”。つまり電気を操る超能力者だよ。」

はやて「ちょ、超能力ってあの超能力かいな!?!」

元いた世界では超能力なんてものは都市伝説の類いだと思っていたはやて達は目の前にいる本物に驚く。まあ、彼女達はそれ以上に入り得ない魔法なんて物に出会っているのだから驚く必要はないと思うが……。と、その時、

ヒュンッ

????「お姉さま !!!!!」

突如美琴の後ろから大声が聞こえたかと思うと、その声の主が美琴の胸を掴もうとして、

ドゴンッ

????「ゴフッ!？」

美琴の肘打ちを鳩尾にもろに受け蹲った。それはやや赤に近い茶色の髪をツインテールに結っている少女だった。そして美琴はやや呆

れ気味に声を掛ける。

美琴「あんたは何をやってんのよ？ 黒子。」

黒子「ひ、酷いですわ、お姉さま。私はただちょっとしたスキンシップを……」

美琴「胸を揉もうとすることがスキンシップな訳ないでしょ！？
立派なセクハラよ！！ 大体知り合いがいるのにやるな！！」

黒子「知り合い？」

黒子と呼ばれた少女が周りを見ると当麻達に気付き、

黒子「ああ …… 何故こんなところに腐れ類人猿がいるんです
の ……」

当麻に対してそう言い放った。その様子を見たのはが尋ねる。

なのは「こ、この子は美琴ちゃんの知り合い？」

美琴「ああ、えっと、この子は白井黒子って言って私のクラスメイトで……」

当麻・一護「御坂を追い回す変態だ。」

黒子「失礼ですわね。私はただお姉さまを愛しているだけでお姉さまに近づく野蛮な男達を排除しているだけですわ。」

なのは達は思った。それは十分変態に値しているのではないかと……と。すると黒子達がなのは達3人に気付いた。

黒子「あら？　そういえばそちらの方々は初めて見ますわね？」

なのは「あ、私は高町なのはっていうの。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウン。よろしくね。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな！」

リクオ「はやて達明日からうちの高等部2年に転入するんだ。」

黒子「あら、では先輩ということですね。私は高等部1年でお姉さまのクラスメイトの白井黒子と申しますの。ぜひお姉さまとは仲良くしてあげて下さいですの。」

美琴「あんたは私のお母さんか!!！」

黒子の最後の言葉に美琴が突っ込む。だが黒子は頭の中でこんなことを考えていた。

黒子（この御三方が彼らとくっついてくれればお姉さまへの毒牙も減りますわ。そうすれば私とお姉さまの仲は安泰、グフフフツツ……）

そんなことを考えてる黒子の笑顔は実に腹黒く、当麻達は冷や汗をかいた。と、ここではやてが、

はやて「ところでさっき黒子ちゃん突然美琴ちゃんの後ろに現れたんやけど、ひよっとして黒子ちゃんも淡希ちゃんと同じ能力なんかないな？」

リクオ「あ、それは違うよ、はやて。結標さんの能力は“座標移動[↑]座標移動”だけど、白井さんの能力は“空間移動[↑]空間移動”って言う別の能力なんだ。まあ、同じ空間移動系の能力であるのには違いはないけどね。」

一護「まあ、その能力のせいで御坂は苦労してるみたいだけどな……。」

フェイト「え？ どうして？」

美琴「……いつもシャワーを浴びてる時に勝手に侵入して胸を揉んでくるんです……。」

それを聞いた瞬間、なのはとフェイトは思わずはやての方を見た。

はやて「な、何や2人とも？ 何で私の方を見るんや？」

なのは「ううん……何でもないよ、はやてちゃん……。」

フェイト「そうだよ、はやて。別に“はやてにそんな能力が無くて良かった”なんて思ってないよ。」

はやて「フェイトちゃん！？ 明らかに本音を口に出してるやないか！！ うええええん！ リクオ君！ 2人を私をいじめろ〜！！」

リクオ「ええええっ！？ ええと、ま、まあ落ち着いてよ、はやて。」

「
実ははやてがリクオに慰められてる光景がラブコメっぽいために周りの目を引いていたことを本人達は知らない……。と、ここでリクオが、

リクオ「あ、そうだ！　ねえ、御坂さん、白井さん。2人はどこかバイトのできる場所を知らない？」

美琴「バイト？　あんたバイトするの？」

一護「違えよ。バイト探してんのはなのは達の方だ。ちょっとした訳でな、金がいるらしいんだよ。」

一護は事情をぼやかしながら話した。まあ、ぼやかす理由など言わずもがなであるが……。

美琴「うーん、バイトか……。私は心当たりないわね。」

黒子「私もですわ。……って、あああああっ！！！！」

当麻「うおっ！？ ど、どうしたんだよいきなり！？」

黒子「お姉さま！！ 今日、今日は寮監のルームチェックの日ですわ！！！！」

美琴「げっ！！ 急いで帰らないと……………」

美琴・黒子「殺されるじゃない（殺されますわ）！！！！」

そう言う2人の顔は命の危機に瀕してるかの如く真っ青だった。

美琴「悪いけどこれで失礼するわ！ あと力になれなくてごめんなさい！！ 黒子行くわよ！！！！」

黒子「はいですの!! では皆さん、これにて失礼しますわ!!」

そして美琴はなのは達に一礼して謝ると黒子と共に姿を消した。

フエイト「な、何かすごく焦ってたけど寮監のルームチェックってそんなに怖いのか?」

一護「あ、ああ。確かあいつらの泊まってる寮の寮監って特異能力者でも捻り潰すくらいの実力の持ち主らしいからな……。」

当麻「御坂でも勝てないらしい……。」

なのは「な、なんか凄く会いたくないの……。」

はやて「せ、せやね……。」

一護や当麻の言葉になのは達の顔も自然と青ざめる。

リクオ「でもこの後どうしようか？」

当麻「うーん……とりあえず中心街に行ってみようぜ。あっちなら店も一杯あるしな。」

という訳で当麻達は学園都市の中心街へ行くことにした。

第13学区　学園都市は全部で23の学区に別れている。その中でも第13学区は多くの店が立ち並ぶ商業区で、日曜ともなれば多くの学生が集まり買い物を楽しんでいる。まあ、雰囲気は東京の原宿などに近いだろう。

なのは「それにしても本当に学生の街なんだね。周りも皆私達と同じ年くらいの人ばかりだし。」

当麻「まあ人口の7割が学生だからな。大人はほとんど教師か研究者だし。」

と、ここでフェイトは一つ疑問を抱き、当麻達に尋ねる。

フェイト「ねえ、そういえばこっつて大人のほとんどが教師と研究者って言ったけど警察の人とかは？」

一護「ん？ 学園都市に警察官はいねえよ。」

なのは「…………え？」

はやて「け、警察がおらんって…………それじゃあ犯罪が起これたらどうするんや!？」

リクオ「大丈夫だよ、はやて。学園都市に警察はいないけど、下手

をすれば警察よりも上の組織はあるよ。」

はやて「……警察よりも上の組織？……」

当麻「それが学生だけで構成されてる治安部隊“アンチスキル風紀委員”と有志ジャッジメントの教師達で構成された治安部隊“警備員”だ。」

フェイト「学生と教師で構成されてる部隊……」

リクオ「あ、さっき会った白井さんも風紀委員の1人だよ。」

なのは「ふえ！？ 黒子ちゃんが!？」

一護「あいつ犯罪者連中にはかなり恐れられてるからな……」

当麻「いや、でもあいつらよりはマシだろ……。」

「はやて」？ 誰や？ あいつらって？」

「護」ああ、そいつらは……」

と、ここでなのがあることに気付いた。

なのは「ねえ、当麻君。」

当麻「ん？ どうした？ なのは。」

なのは「あそこの銀行、なんで昼間なのにシャッターが閉まってるの？」

と、その時、

ドカアアアンッ!!!

一同「っ!!??」

突如シャッターが吹っ飛んだかと思うと、

男 「さっさとずらかるぞ!!」

煙の中から数人の覆面を被った男たちが現れた。

なのは「あれって!？」

フェイト「銀行強盗!!」

思わぬ事態になのはとフェイトは声を上げた。そしてその間にも覆面の男達は事前に用意されていたと思われるワゴン車に乗り込み、

猛スピードで発進した。

はやて「あかん！ 逃げられるで！！」

一護「ちっ！ しょうがねえな……」

当麻「待て！ 一護！」

なのは「当麻君！？ なんで止めるの！？」

当麻「前をしてみる……噂をすればなんとやらって奴だな。」

なのは達は当麻が見ている方を見ると、そこにはワゴン車の行く手を遮るかのように1人の少女が道の真ん中に立っていた。その少女は黒髪のロングヘアに巫女服と正に“大和撫子”という表現が似合う少女だった。だがその左手に持っているのは一本の刀である。

男 「何だあのガキは!？」

男 「知るかよ! 轆いちまえ!！」

男たちは少女に構わずスピードを上げる。だが、

パンパンパンパンパンッ、ギギギギギギギッ、

男D「な、何だ!？」

男 「タイヤが全部パンクしやがった!！」

男F「んなバカな!？」 同時にパンクなんて有り得るかよ!！」

車の中で男たちが混乱してる間にもワゴン車は激しい音をたてながら巫女服の少女に向っていく。すると少女は少し横に動き、接触するかしないかのギリギリの位置に立った。そしてワゴン車が勢いを

殺し切れずに少女のすぐ横を通過しようとした瞬間、

チャキツ、ヒュンツ、

それはまさに一瞬だった。刀に手を掛けたかと思うと、神速の速さで抜刀し振り抜いた。そして、

キンツ、ズバンツ……

鞘に収めた瞬間、ワゴン車の車体が前後真っ二つに両断された。

男 「なっ!?! 嘘だろ!?!」

男 「くそっ!! 車から降りて逃げるぞ!!」

男達は車を乗り捨て逃げようとするが、

「????」はいはい！ 残念だけどここから先は行き止まりだよ。

「

彼らの目の前にゆるいパーマのかかった金色の髪をツーサイドアップに結っている少女が立っていた。

男 「何だお前!?!」

男D「どけ!! でねえとこいつで吹っ飛ばすぞ!!!!」

男達は一斉に持っていた拳銃を目の前にいる少女に向け構える。だが、

ドドドドドドオンッ!!!

男達全員「なっ!?!」

男達の持っていた拳銃が全て手元から吹っ飛んだ。

男 「な、何だ今のは!？」

男F 「何が起きたんだ!？」

すると、

ジャキッ

???? 「何が起きたかわかんなかったのか？ 俺達がお前らの拳銃を撃ちおとしたんだよ。」

???? 「そんなことも判断できないのに強盗しようだなんて論外ね。」

男達の後頭部に銃が突き付けられた。突き付けているうちの一人は短い黒髪で、ワインレッド色のブレザーに黒のズボンというどこかの制服を着ている男、もう1人は小学生くらいの背にピンク髪のツインテール、そして赤紫色の瞳が特徴の少女だった。そしてその姿を見た男の1人が口を開く。

男 「ピ、ピンク髪のツインテールのガキを連れた風紀委員……
じゃ、じゃあお前らまさか、学園都市最強最悪の風紀委員集団……
バ、“バスカービル”！！??？」

ドオンッ

男の発言を遮るようにピンク髪の少女が発砲した。そして、

????「誰がガキですって!………私は……高2だ
!」

激昂しながら男の頭に向って発砲……

ドオンッ

???「っ!？」

出来なかった……。突如聞こえた発砲音……。その主は……

当麻「はいはい、そこまでにしとけよ。」

当麻だった。その右手には少々大きめの拳銃が握られていて銃口は上を向いている。どうやら威嚇射撃だったようだ。と、そこに

ゴンッ

当麻「痛っ!？」

一護「当麻、お前何発砲してんだよ!？」

一護が当麻に拳骨を食らわせた。

当麻「何すんだよ、一護!！」

一護「……はあ……なのは達見てみる。」

当麻「ん?……あ……。」

当麻がなのは達の方を見てみると、本人達は目の前の出来事に驚きすぎて完全に硬直してしまっていた。そして、

はやて「ちよっと待たんかい!！」

はやての叫びが辺りに響く。

はやて「何や今のは！？ 刀で車を真つ二つにしたり拳銃をバカスカ撃つたり！！ 皆学生やろ！ 何で拳銃とか刀を持ってるんや！？ ていつか何で当麻君まで拳銃持ってるんや！？」

あまりの混乱ではやては若干キレの悪い突っ込みをした。すると、

リクオ「は、はやて落ち着いて！ この人達は僕らの友達だから！
！」

はやて「……………へ？」

一護「よう、風紀委員の仕事お疲れさん。キンジ、アリア、理子、白雪。」

キンジ「おう、一護、当麻、リクオ。」

理子「やっほー！」

白雪「こんにちは。上条君、黒崎君、奴良君。」

アリア「何であんた達がここにいるのよ!？」

キンジ「アリア……挨拶くらいまともに……」

アリア「うるさいバカキンジ！ 風穴開けるわよ!!」

当麻「あ、相変わらずだな、神崎は……。お前も苦労してるな、遠山。」

キンジ「わかってくれるか上条……無力化した犯人への発砲……始末書ものだな、こりゃ……。そういえばそっちの3人は誰だ？初

めて見る気がするんだが……」

当麻「ああ、こいつらは……」

理子「ああっ！ 理子わかつちやったよっ！」

当麻「はい？」

理子「その3人は当君達の彼女だっ！」

当麻・一護・リクオ

「はあああ（ええええ）っ！！！！……？？」

当麻達は理子の突然の爆弾発言に思わず仰天した。

一護「おい理子…… お前何いきなりとんでもねえ発言してんだ！」

こいつらは明日から俺達の同級生になる奴らだ！ 何で俺達の彼女って発想が出てくる！？」

理子「ええっ、結構名推理だと思ったのになあ。」

当麻「“名”推理じゃなくて“迷”推理だろ！」

当麻達は理子の推理を必死に全面否定するが、当のなのは達は……

なのは・フェイト・はやて（か、彼氏／／／／……。）

万更でもなかったりする……。と、ここで当麻が、

当麻「なあ、遠山。そっぴやレキはどうしたんだ？さっきのタイヤのパンク、あれレキの狙撃だろ？」

????「呼びましたか？」

当麻「はい？ うおっ！？ お、おう、レキ。いつの間に俺の後ろに？……」

当麻に突如話し掛けてきたのは、薄いエメラルドグリーンのを髪を束ね首にオレンジのヘッドホンを掛けている無表情の少女だった。

キンジ「レキ、お疲れさん。でもわざわざお前が来ることもなかったのに……」

レキ「いえ、これも風紀委員の仕事ですので……。」

一護「相変わらず無表情だな、レキは。」

キンジ「それもレキの個性だよ。おっと、そういやまだそっちの3人に自己紹介してなかったな……。俺は遠山キンジ。当麻達のクラスメイトだ。」

理子「ヤッホー。私は峰理子だよ。理子って呼んでね。」

白雪「はじめまして。私はキンちゃんの幼なじみで上条君達のクラスメイトの星伽白雪ほしあきです。よろしくね。」

リクオ「星伽さん……遠山君の幼なじみっていうのは別にいいんじゃない……。」

白雪「何言ってるの奴良君!? そこが一番重要だよ……!」

リクオ「あ、そ、そうなんだ……。」

レキ「レキと言います。よろしく。」

アリア「神崎・・アリアよ。アリアでいいわ。」

するとなのは達が目を見開いてアリアを見た。

アリア「…な、何よ?…」

なのは「あ、ご、ごめんね。知り合いの子の声とそっくりだったから……あ、私は高町なのはっていうの。」

フェイト「私はフェイト・T・ハラオウン。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな、アリアちゃん。」

アリア「なっ／＼／＼!? ア、アリアでいって言うてるでしょ／＼! “ちゃん”なんかいらないわよ／＼／＼!」

理子「あゝ! アリア照れてるゝ! かわいいゝ!」

アリア「っ／＼／＼!?! う、うんおに／＼おに／＼おに／＼おに／

／／／！！ 風穴開けるわよ／／／！！」

一護「お、おい！ 風紀委員が些細なことで一々拳銃抜くなよ！！」

理子の言葉にアリアが赤面して拳銃を抜こうとし、それを一護が慌てて止めるかという何とも力オスな展開になり始め、その様子にリクオや当麻は苦笑いを浮かべるしかなかった。一方なのは達は……

なのは《ねえ、フェイトちゃん、はやてちゃん。アリアちゃんって……。》

フェイト《うん。アリスそのものだよね。声は本人と同じだし、性格だってそっくりだし……。》

はやて《いや、にしても似すぎやろ。別世界でこんなに友達と声がそっくりな人初めて見たで。……そう言ったら白雪ちゃんの声もキヤロそっくりやなかった？》

なのは《そ、そういえば確かに……雰囲気もどことなくキャラに似てるかも……》

フェイト《……キャラ……》

リリカルなのはでお馴染みの“念話”でアリアと白雪がアリサとキヤロにそっくりであるということを確認し合っていた。ちなみに“念話”をご存知でない方は一種のテレパシーと思っておいて下さい。

当麻「にしても神崎、お前よくその体でコルト・ガバメントを二丁拳銃にしてるよな。いくら小型化されてるって言っても撃った時の反動は半端ないから普通はあり得ないだろ？」

それを聞いたキンジとアリアはやや呆れ顔で当麻の顔を見た。

キンジ「お前がそれを言うか？……」

当麻「はい？」

アリア「あんたの使ってるスター・ムルガーの方がずっとあり得ないわよ！ 何よその改造銃！？ 撃った時の反動がコルトの10倍って！？」
何でそんな拳銃を平気な顔で連射できるのよ！？」

当麻「お、おい！ それじゃまるで俺が人外みたいじゃねーか！？」

アリア・キンジ

「そうでしょ！！（いや、そうだろ。）」

当麻「ひ、ひどい……。」「

当麻はキンジとアリアの自分に対する評価に思わずうなだれる。するとここではやてが、

はやて「な、なあ、リクオ君。」「

リクオ「？ どうしたの？ はやて。」「

はやて「ええ加減に話してくれへん？ この人達がさっき話してくれた風紀委員うちゅうことはわかったんやけど……何で皆学生なのに拳銃やら刀やらを持ってんねん？ ありえへんやる普通……。」

キンジ「……なあ奴良。ひよつとしてお前達まだ……。」

リクオ「え？ あ、うん。それについてはまだなのは達に説明してないんだ。」

「護」で、俺達がそれについて説明しようとした矢先にさっきの銀行強盗が起きたって訳だ。」

キンジ「なるほど。まあ事情を知らない奴がさっきの光景を見れば驚くのも当然か……。」

理子「はいはい……！ じゃあそれについて理子りんが説明するよ
くん
」

ここで理子が勢いよく手を上げた。すると、

キンジ「……変なこと教えんなよ、理子……。」

キンジ「ぶー。キー君ひどくい！ 理子だって説明くらいはちゃんとするよー！」

理子はキンジの言葉に少々ふてくされながらも説明し始めた。

理子「えつとね、私達は皆、“銃刀携帯特別免許”っていう資格を
持つてるのだよ！ まあ私たちは略して“携帯免許”って呼んでる
けどね。」

なのは「銃刀携帯特別免許って……。」

フェイト「銃や刀を持っていいってことー!？」

理子「まあ学園都市内限定だけどね！」

はやて「んなアホな！？ 学生が武器を所持していいなんて、そんな資格あるわけが……」

レキ「この資格はちゃんと警察庁が公認……つまり日本の政府によって認められています。」

フェイト「で、でもどうして？……」

アリア「それはここが学園都市だからよ。」

白雪「知ってるとは思っけど、学園都市は人口の7割が学生で、残りの3割の大人も教師や研究者がほとんどだよ。有志の教師によって構成された警備員も武器を所持できるけど、これだけ巨大な都市の治安をそんな数少ない教師だけで維持するなんて無理だし、凶悪な犯罪者が出た時に何も武装できなかつたら大変なことになる。だから学園都市はそれを防ぐために一部の生徒に武器の所持を許可

してるの。」

キンジ「まあこの免許を取るのはかなり難しいし、それに銃や刀なんて物ともしない特異能力者はたくさんいるからな。学園都市の外の人間から見ればそりゃ常識はずれなことだろうけど、学園都市にいる人間にとってはそこまで驚くようなことじゃねえよ。」

なのは「……あれ？ 銃を持ってるってことはひょっとして当麻君も………」

当麻「ん？ ああ、俺も風紀委員だ。ついでに言えば一護とリクオもそつだぞ。」

一護「つっても俺達は“ライオット・ジャックシメント特別風紀委員”っていう臨時の風紀委員だけだな。」

フェイト「じゃあひょっとして一護とリクオも武器を持ってるの？」

「護「いや、俺は携帯免許自体持ってねえ。風紀委員でも免許持ってる奴は結構少ねえんだよ……まあうちの学校ではかなりの奴が持つてるけどな……。」

リクオ「僕の武器はこれだよ。」

そう言うとリクオは背中から何かを取り出した。

はやて「そ、それって……ド、ドス!？」

そう……リクオが取り出したのはヤクザなどがよく持っている長ドスだった。

リクオ「うん。これ実家の家宝みたいな物だったんだ。」

なのは「リクオ君がドスを使う姿なんて想像つかないけど……」

キンジ「言っておくが奴良は白雪よりも強さが上だぞ。」

はやて「なっ！？ ホ、ホンマかいな！？」

リクオ「と、遠山君！ それはさすがに……」

キンジ「お前なあ……能力を使わずにその姿のまままで勝ってるのに弱いはずねえだろ……。」

白雪「かすり傷一つ負わせられなかったしね……。」

キンジと白雪の話の聞いてははやて達は絶句した。まあ見るからに温厚な今のリクオが、ついさっきワゴン車を真つ二つに両断した少女より強いなんてまるで想像がつかないのだ。と、ここで、

当麻「って、考えてみりゃ本題を忘れてた！ まあ遠山、どこかバイトを募集してるとこ知らないか？」

キンジ「バイト？ 何でだよ？」

一護「俺達今学園都市を案内しながらなのは達のバイトを探してる
とこなんだよ。」

キンジ「バイトか……俺が知ってるここはもうバイト募集してねえ
んだよな……なあ理子、お前知らねえか？ そういうの結構詳しい
だろ。」

理子「残念ながら無いんだよ、キー君。今学園都市の学生がすん
ごく増えちゃってるからね。その分バイトで働く学生も増えて空
きがないんだよ。」

アリア「そついえば風紀委員でも学生が増えたことで治安が悪化す
るんじゃないかって議論もあつたわね。」

レキ「……アルバイトを募集している場所でしたら一つ心当たりが
あります。」

キンジ「レ、レキ!？」

当麻「マジで! どこだ!？」

レキ「風紀委員の射撃訓練場です。」

すると一瞬空気が固まった。

キンジ「……そ、そういえば確かに人手を欲してたな、あそこ……。」

当麻「まあ、でも……なあ……。」

なのは「う、うん……。」

フェイト「ちょっと…ね……」

はやて「あ、ありがとっな、レキちゃん……でもちょっと遠慮しとくわ……」

レキ「？　そうですか。」

レキは少々首を傾げつつも無表情で答えた。

白雪「ねえ、キンちゃん。そろそろこの人達を連行した方がいいんじゃないかな？」

キンジ「……そういえばこいつら置きっ放しだったな。つか何で気絶してんだ？……」

キンジは地面で依然としてのびている強盗犯達を見ながらそう呟いた。ちなみに何故のびているかというと実は当麻達が会話をしている最中に犯人達がワーギャー騒いでいたため、レキが無表情でありながら体から怒りのオーラを放ちつつライフルの銃口を頭に当て、

犯人達はそんなレキに対する恐怖で失神してしまったのだ。まあそのことをレキ以外は知らないのだが……………。

キンジ「じゃあ俺達はこのつら連行してくわ。悪いな、力になれなくて。」

なのは「あ、ううん。ありがとう、キンジ君。」

理子「じゃあねーなのちゃん、フェイちゃん、はやちゃん！」

フェイト「な、なんかいつの間にか変な呼び名が……………」

リクオ「あはは……………」

はやて「ほんなら明日学校でな！　アリアちゃん。」

アリア「だ、だから普通に呼びなさいよ／＼／＼!!」

白雪「じゃあ明日クラスでまた。」

一護「おう。」

レキ「失礼します。」

そしてキンジ達と別れた当麻達は再びバイト探し兼町案内を再開し始めた。この時フェイトは、

フェイト（何だろう……普通の人にまだ会ってない気がする……本当にここ地球なのかな?……）

学園都市が地球にあるのかどうか疑問に思いながら苦笑いを浮かべていた……。

END

普通の人間なんて世の中早々いません!! (後書き)

どうも! 黒狼です!

という訳で新キャラは“とある科学の超電磁砲”と“緋弾のアリア”のキャラを出しました! ですが緋弾のアリアのキャラは思った以上に書きにくかったですね。特に理子と白雪が……。

理子みたいな猫被ってる女子の喋り方って意外と難しいんですね。それに白雪もアニメだとキンジヤアリア以外の同年代の友達との会話描写が全然ないので、当麻達との喋る時は敬語にするかしないか迷いましたけど、最終的に敬語は無しにしました。

そして今回書いてて思ったのですが、ほとんどギャグ要素がなかったですね……。一応ギャグがメインのはずなのに……。

次回バイト探し後編です! 新キャラは多分今回よりもさらに多く出ると思いますので!!

ではまた!!

同じ声の人間も多すぎると作為を感じる！（前書き）

街案内&バイト探し後編です！！

前回より多数のキャラが登場します！ 話はやはりグダグダですが
……。

では本編をどうぞ！

同じ声の人間も多すぎると作為を感じる！

当麻「にしても、バイトを募集してるとこ少なえな〜。」

一護「さっき理子も言ってただろうが。学生の人数が増えてる分バイトの求人倍率も上がったよ。」

リクオ「まあ高校生にとってバイトは結構大事だしね。」

キンジ達と別れた後、当麻達はいろいろな店を回ってみたがやはりバイトを募集しているところはなかった。

なのは「ご、ごめんね。私達のために……。」

当麻「何言ってたんだ、なのは。お前らは俺達のためにバイトしようとしてくれてんだから手伝うのは当然だろ。それに……前の居候は

バイトして恩返ししようなんて発想は微塵も持ってなかったしな…
…ハハハ……。」

当麻の放つ不幸オーラになのはは顔を引きつらせる。と、そこに、

コロコロッ

当麻「ん？ なんだこれ？」

フェイト「ボール？」

当麻達の目の前にボールが転がってきた。当麻はそのボールを拾う
とそれは赤いゴムボールだった。

はやて「けど何でゴムボールが転がってきたんや？」

あむっ

????「アンツ！」

当麻「はい？」

鳴き声と共に突如横から真っ白な犬が現れたかと思うと、猛スピードで当麻の持つているボールに突っ込んで……

ガブツ

当麻「ギヤアアアアツ!!??」

…行かずに当麻の頭に噛り付いた。そしてなのは達はその光景に言葉を失った。問題は犬の大きさである……どう考えても2、3メートルはあるのだ。誰もが一瞬“これは犬なのか!?”と疑ってしまっただろう……。

「????」「ガウウウウッ……………」

当麻「ああ……………今行きます……………ご先祖様……………」

一護「おい！ そっち行くな当麻！ お前明らかにこの世とあの世の境界を踏み越えようとしてるだろ！？ 三途の川を渡る気だろ！？」

フェイト「は、早く当麻を助けないと……………」

そう言うフェイトはいつの間にか黒い服に白のマントを羽織っていて右手には漆黒の鎌が……………」

はやて「って、フェイトちゃん！？ 何でいつの間にかバリアジャケットになってる上にバルディッシュを起動させてるんや！？ それあかんやろ！ 首と胴体を分けるつもりかいな！？」

と、その時、

????「定春　!!!」

????「! アンツ!」

誰かの呼び声に当麻に噛み付いていた真つ白な巨大犬は反応すると、
当麻を放して声のする方へと走っていった。

なのは「だ、大丈夫!? 当麻君!」

当麻「ふ、不幸……だ……ガクツ……」

当麻が堕ちてる間、

????「アンツ!」

「???」「よしよし、いい子ネ！ けど何で口の周りが赤いアルか？」

先ほどの声の主は巨大犬と触れ合っていた。その人物は赤いチャイナ服を着て紫色の傘を持ち、赤橙色の髪をぼんぼりで纏めている少女だった。どうやらその犬の飼い主のようだ。すると、

「???」「あつ！ いったーにリクオアル！ おーい!!！」

その少女は一護とリクオに気付くと手を振ってきた。一護とリクオは顔を引きつらせながらもそれに応え手を上げた。

フェイト「あ、あの子も一護達の知り合いなの?……」

一護「あ、ああ……。」

リクオ「ぼ、僕達のクラスメイトだよ、あの子も……。」

すると少女は巨大犬に乗って一護達の元にやってきた。

「????」一昨日ぶりアルな！　いつちー、リクオ！
あれ？　何で当麻血だらけアルか？」

当麻「定春に頭から噛まれたんだよ！！　その噛み癖なんとかしろ
！　一瞬三途の川が見えたじゃねえか！！」

「????」大丈夫アル。ちゃんと生きてるんだし。」

当麻「別に生死が問題じゃないから！　頭から血が出てる時点で結構問題だから！！」

少女の他人事なセリフに当麻は突っ込んだ。

リクオ「えっと、紹介した方がいいよね。この子は神楽ちゃん。僕達のクラスメイトで中国からの留学生なんだ。」

神楽「あれ？ そっちの3人は誰アルカ？ 初めて見るネ。」

なのは「私はなのは。高町なのはっていうの。よろしくね！」

フェイト「私はフェイト・ハラオウン。フェイトでいいよ。」

はやて「八神はやてや。よろしゅうな、神楽ちゃん！」

一護「こいつら明日からうちの学校の高等部2年に転入してくるんだよ。」

神楽「マジアルか！ じゃあ同級生あるネ！！ ヨロシクアル！
あ、この子は定春！ 私のペットネ！！」

定春「アンツ！！」

神楽が紹介すると定春は元気良く鳴いた。と、ここで当麻が神楽に尋ねる。

当麻「神楽、ちなみに聞くがお前どっからボール投げた？」

神楽「え？ 第6学区の自然公園ネ。」

リクオ「えええええ！？ あそこからここまで直線距離でも2キロはあるよ！ どんだけ力入れて投げたの神楽ちゃん！？」

一護「流石夜兎族だな……………」

なのは「夜兎族？」

はやて「なんやそれ？」

聞き慣れない名称になのは達は首を傾げる。

当麻「夜兔族っていうのは世界最強の戦闘一族のことだよ。神楽はその一族の1人で、ありえねえ怪力の持ち主なんだよ。」

フェイト「えっ!?! 神楽が!?! で、でもとてもそんな風には見えないんだけど……」

まあ目の前にいる華奢で小柄な少女が怪力の持ち主と言われても普通は信じないであろう……。すると一護が、

一護「2キロ離れたところから投げてるボールがここまで届いてる時点で十分おかしいだろ。それにこいつならトラックを片手で持ち上げられるくらい余裕だぞ多分……。」

その言葉を聞いたなのは達は絶句するしかなかった……。と、ここで、

神楽「ああっ！ いけないアル！ もうすぐ“渡る世間は〇ばかり”の再放送が始まるネ！！ 私はこれで失礼するアル！ また学校で会うヨロシ！」

リクオ「う、うん。」

はやて「ほんならなく、神楽ちゃん！」

神楽「行くヨ！ 定春！」

定春「アンツ！」

そして神楽は定春にまたがって帰っていった。そのスピードはスクーター並みであるが……。

なのは《ねえ、フェイトちゃん、はやてちゃん。》

フェイト《う、うん……。》

はやて《神楽ちゃんの声もアリサちゃんそっくりやったな。内心めっちゃビックリしたで……。》

まさか1日で2人も同じ友達にそっくりな声の人物に出会うとは思っていなかったなのは達は呆気に取られていた……。

当麻「あ……神楽にバイトのこと聞くの忘れてた……。」

一護「そ、そういやそうだな……。」

リクオ「まあ……でも神楽ちゃんだし……。」

当麻・一護・リクオ

(むしろ聞かなくて正解な気がする……)

神楽に聞き忘れたことを後悔する気持ちは神楽のことをよく知る当麻達にはなかった……。

リクオ「でもなんかバイトとかに詳しい人がいた方がいいね。」

一護「確かにな……つってもそんな都合良くいる訳……」

と、その時、

????「あれ？ 当麻さんに一護さんにリクオさん？」

一護達は突如自分達を呼ぶ声に気付き振り返ると、そこには水色の短い髪で執事服を着ている少年がいた。

一護「おお、ハヤテじゃねえか。」

ハヤテ「やっぱりそうでしたか。お久しぶりです。」

当麻「ていつか相変わらず俺達のこと“さん”付けなんだな……。」

リクオ「別に呼び捨てでいいのに……。」

ハヤテ「とんでもないですよ！ 皆さんは先輩なんですから！」

リクオ達の言葉をハヤテは慌てて否定する。すると一護がキョロキョロしながら辺りを見渡し始めた。

一護「そういえばあいつは……ってここにいる訳ねえよな……。」

????「それは誰のことだ？」

声が聞こえてきた方を見ると、今度は明るい金髪をツインテールにしている背の低い少女が立っていた。

当麻「ナ、ナギ!？」

ナギ「何をそんなに驚いているのだ？ 当麻。」

一護「いや、だってよ……」

リクオ「まさかナギちゃんが外に出てるなんて思わなかったから……」

ナギ「おい！ お前たちは私を何だと思っているのだ!！」

当麻・一護「引きこもり。」

ナギ「お前たちは叩き潰されたいのか!!」

ハヤテ「お、お嬢様落ち着いて下さい!」

ナギ「止めるなハヤテ!」

そんな感じで当麻やハヤテ達がやり取りをしている間なのは達は、

なのは《またアリサちゃんと同じ声の子が……》

はやて《どんだけいんねんアリサちゃんの声!? いくら何でも異常やる!》

フェイト《それにあのナギって子、性格も似てるし“お嬢様”って呼ばれてるし、本当にアリサを見てるような感じだね……。》

すると、

ナギ「そういえばお前たちの後ろにいるその者達は誰なのだ？」

ハヤテ「そういえばそちらの方々は初めて見ますね。」

当麻「ああ、この3人は明日からうちの高等部2年に転入するんだ。」

ハヤテ「あ、そうなんですか。はじめまして、僕はナギお嬢様の執事で一護さん達の後輩の綾崎ハヤテと言います。」

ナギ「私は三千院ナギなのだ！ よろしく頼むぞ！」

なのは「ハヤテ君にナギちゃんだね？ はじめまして。高町なのはっつていいいます。」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。フェイトでいいよ。」

はやて「私は八神はやてや。いやー、まさか同じ名前の男の子がいるとは思わへんかったわ！ よろしゅうな、ナギちゃんにハヤテ君！」

3人が挨拶を終えると、ハヤテとナギは驚いた様子ではやての顔をじっと見た。

はやて「ど、どないしたんや二人とも？」

ナギ「！ す、すまないのだ！」

ハヤテ「実はお嬢様の友達に八神さんとそっくりな声の人がいます、しかもその人も関西弁なので一瞬戸惑ってしまいました。すみません、まじまじと顔を見たりなんかしてしまっ……。」

はやて「え、ええよ別に！ 気にしておらへんから。」

当麻「ああ……はやての声はどうも誰かとだぶると思ったら、あいつの声にそっくりだったのか……。」

一護「考えてみれば全く一緒だな……。」

はやて「なんや？ リクオ君達もその子を知ってるんか？」

リクオ「うん。ずいぶん前からよく知ってる子なんだ。」

すると、

「……？」
「おりゃっ……！」

ガシッ

一護「うおっ!?!」

後ろから誰かが一護に抱きついてきた。一護は何とか耐え切るとその人物の首の後ろの襟を掴んで持ち上げてみると、それは灰色髪でおかつぱ頭の少女だった。

一護「はぁ……やっぱりお前か、咲。」

????「久しぶりやのにその反応はないで、一兄。」

当麻「よう…」

リクオ「久しぶりだね、咲夜ちゃん!」

????「当兄とリク兄も久しぶりや!」

少女は当麻とリクオにも関西弁で元気良く挨拶をした。すると、

はやて「えっと……ちょっとええか？」

「……」

はやてが少女に話し掛けた。それに対して少女は呆気に取られた表情になり、そして……

「……はやて」

「ウチ（私）と同じ声や……」

2人とも同時にそう呟いた。

なのは「エ、エコーがかかっているみたいなの……」

フェイト「それだけ2人の声が似てるってことだね……」。

ハヤテ「まさか咲夜さんと同じ声の人がいるとは……………」。

ナギ「う、うむ……………私も予想だにしなかったのだ……………」。

まさかの事態に全員が啞然としてしまう。すると、

咲夜「ああ、もうどうなつとるんやこれ!? 一兄達に挨拶しに来たはずが何で同じ声の人間に会うなんて状況になつてんねや!？」

ハヤテ「お、落ち着いて下さい咲夜さん!」

咲夜「ん? なんや、ナギとハヤテもおつたんか。」

ナギ「おい! ついでみたいに言つな、咲!」

当麻「ああ、まったく落ち着けお前ら！　いつまで経っても話が進まなくなるだろうが！」

当麻の一喝でとりあえず落ち着く。

一護「ええとだな、咲。こいつらは明日からうちの高等部の2年に転入する奴らで俺達の知り合いだ。」

なのは「高町なのはです。よろしくね。」

フェイト「私はフェイト・ハラオウン。フェイトでいいよ。」

はやて「私ははやて。八神はやてや。さっきは驚かしてしもつて「メンなあ。」

一護「こいつは愛沢咲夜。ナギの幼なじみで俺達が中学の頃からの仲だ。」

咲夜「よ、よろしゅうお願いします。あとさっきはすみません／＼／……。」

先ほどの自分の行動を思い出したのか咲夜は少々恥ずかしそうにしながら縮こまっていた。まあ初対面の、まして年上の人物の目の前でワーギヤー騒いだことを冷静に考えると恥ずかしく思えてきてしまうのも無理はない。

ナギ「ところで咲。お前なんでこんなところにいるのだ？」

咲夜「ん？ 何でってそんなん決まって……ああー！ー！ー！」

リクオ「うわっ！？ ど、どうしたの急に！？」

突然咲夜が大声を上げたため、リクオが驚いて尋ねた。

咲夜「当兄、一兄、リク兄、伊澄さん知らへん!？」

当麻「伊澄? いや、見てねえぞ……っておい、まさかまた……。」

当麻は予想がついたのか冷や汗を出していた。

咲夜「例のごとく迷子や……。」

ナギ「またか、伊澄の奴……。」

ハヤテ「まあ、いつものことですし……。」

ナギやハヤテも“やっぱりか……”といった表情で呟く。

フェイト「一護、その伊澄って子もナギ達の友達?。」

一護「あ、ああ、そうだ。一つとんでもない欠点を抱えてるけどな……」

なのは「欠点？　どんな？」

一護「……ものスゲー方向音痴だ……」

はやて「方向音痴ってあの方向音痴かいな？　せやけどそんなに大層な欠点って訳じゃ……」

咲夜「それは甘いで、はやて姉。」

はやて「わっ！？　さ、咲夜ちゃん、“はやて姉”ってどういっしょっちゃん？」

咲夜「だってはやてやとそっちのハヤテと被ってしまうやろ？　それに何や姉さんみたいやし……せやから今日から“はやて姉”や！」

はやて「た、確かにそうやね……。ほんで何が“甘い”んや？」

「
咲夜「伊澄さんの方向音痴は普通のそれとはレベルが違うんよ……。」

なのは「どういこと？」

当麻「いや、例えば学園都市にあるナギの家に行こうとして北海道で保護されたり……。」

フェイト「え？……。」

リクオ「この前は学校に行こうとしてパリで見つかったって言うってたね……。」

はやて「……それ、方向音痴とはまた別のものとちゃうか？……。」

当麻達の話聞いたなのは達は最早言葉が出なかった……。するとハヤテがあることに気付いた。

ハヤテ「お、お嬢様……」

ナギ「？ どうしたのだ？ ハヤテ。」

ハヤテ「あれ、伊澄さんではないでしょうか？……」

ハヤテはそう言うと、ある場所に向かって指を差した。それは……学園都市の中でも五本の指に入るほどの高さのある高層ビルの屋上に人影がある……ようなのだが……

ナギ「……遠すぎて見えないぞ……」

あまりにも遠すぎてナギには人影など判別できなかった。

フェイト「ハヤテって凄い目が良いんだね……一体視力いくつなの？……」

ハヤテ「えつと……確か両目とも6・0だったかと。」

はやて「なんやその視力！？ マサイ族か！？」

咲夜「ああ、間違いあらへん！ あの和服に黒髪ロングヘアーは伊澄さんや！」

なのは「ふえっ！？ 咲夜ちゃんにも見えるの！？」

咲夜「当たり前や！ うちがギャグ補正っちゅう能力があるさかい！」

当麻「咲、それ別にお前の能力じゃないからな！？ 作者の悪ふざけに過ぎないからな！？」

リクオ「咲夜ちゃんも当麻も何言ってるんだろっ……」

いろいろと不味い発言がありますが、それは置いておくとしてしまじょう……。と、ここではやてが、

はやて「ていうか何であんなところにその子はおんねん!? やっぱ迷子とか方向音痴とか以前の問題やろ!」

一護「まあ、伊澄だからな……としか俺達には言えねえ……。」

すると、

ハヤテ「あぁー! …… 伊澄さんが風に煽られて落ちてます!」

一同「何ー!?!」

「護」って、驚いてる場合じゃねえ!!」

なのは「こ、こうなったら魔法を……」

ちなみにもう一度言いますが、ありえない視力を持つてるハヤテとギヤグ補正されてる咲夜以外は落ちている伊澄が見えません。あくまでもハヤテの発言が本当であるという仮定の元です。お忘れなく!

ナギ「ハヤテ!!」

ハヤテ「わかっております! お嬢様!!」

だがなのは達が動き出す前にナギがハヤテを呼びハヤテもそれに応え、あるものに向かって走りだす。その先にあったのは……

フェイト「自転車?」

はやて「ま、まさか自転車であの子が落ちる前にあんな遠くのビル
に向かうつもりかいな!? そんな無理に決まって……」

はやてがそう呟く間にもハヤテは自転車にまたがりペダルに足を掛
け……

ビュンッ

その場から消えた……。

なのは・フェイト・はやて「……………え？」

あまりのことになのは達はしばし呆然としてしまっ……。一方当麻
達は、

リクオ「相変わらず綾崎君は……………」

当麻・一護・咲夜

「人外だな（やな）。」

何事もなかったかのようにそう呟くだけだった。

そしてここからはハヤテ視点に切り替えます。

Side：ハヤテ

ハヤテ「うおおおっ！！！！」

一護達がハヤテを人外扱いしている頃、当の本人は落下している少女を目視で捉え、あと500メートルくらいまで迫っていた。ちなみにスタート地点からそのビルまでの距離は直線距離でも約1キロはある…………たかだか数秒の間に1キロ先のビルに迫る時点で明らか人外である…………。だが…………

地面スレスレでキャッチに成功した。

ハヤテ「はあ……はあ……ギ、ギリギリセーフ……。」

????「ハ、ハヤテ様……。」

と、ここでハヤテに受けとめられている少女が口を開いた。

ハヤテ「ご、ご無事ですか？ 伊澄さん。」

伊澄「あ、はい。有り難うございます。あの、その……そろそろ降りてもらえるとありがたいのですが／＼／＼……。」

伊澄という少女はハヤテに礼を言いつつも頬を赤らめながらそう言った。そう……ここはビルの立ち並ぶ都会のど真ん中。その道の真ん中で男の子に抱きかかえられていて恥ずかしくないはずもなかった……。

ハヤテ「あ、こ、これは失礼しました／＼／＼！！！！」

ハヤテもその状況に気付き慌てて伊澄を降ろした。こうして一件落着……と、言いたいところだが、ここで1つ聞こう。ハヤテの乗っていた自転車……あり得ないスピードで走っていた上に運転する人物を失ったそれはどうなったか？……。正解は……

ドカアアアアン！！！！

近くのビルに突っ込んでいきました……。

ハヤテ「……あれ？……」

Side End

それから少しして当麻達が到着した。

伊澄「ではなのはさん達は明日から私達の学校に転入されるのですね。あ、私は鷺ノ宮伊澄と言います。よろしくお願ひしますね。」

なのは「うん、よろしくなの！ 伊澄ちゃん。」

伊澄「それにしても申し訳ありません、当麻兄様、一護兄様、リクオ兄様。ご心配を掛けてしまって……」

リクオ「でも無事で良かったよ。」

フェイト「そうだね。でもその代わりに……」

フェイトはある一点を見る。その先には……ハヤテの自転車が突っ込んだことによって見事に滅茶苦茶になった店があった……。

当麻「まあ休憩時間で客もいなくて店員にも怪我がなかったのが不幸中の幸いだな。」

はやて「せ、せやけどこれ……どないすんねん……?」

はやては店の惨状に顔を引きつらせる。はつきり言って“一体いくら弁償することになるんだ?……”というような状態なのだ。

一護「ああ、それなら心配ねえよ。」

なのは「え? どうして?」

すると、

ハヤテ「お待たせしました……。」

ハヤテが苦笑いでナギと共にその店から出てきた。

フェイト「あ、ハヤテ。お店の方の弁償はどうなったの？」

フェイトが心配そうな表情でハヤテに尋ねると、

ナギ「ああ、心配ないぞ。私がさっき修理費用を全額払ったからな。」

なのは・フェイト・はやて「……………え？……………」

ナギの一言になのは達は呆気に取られたような表情になった。

はやて「ええと……………ちなみにいくらや？……………」

ナギ「ん？ たかだか300万だったぞ。」

なのは・フェイト

「さ、300万!?!?!?」

なのはとフェイトはナギの口から出たとんでもない金額に驚きを隠せなかった。

はやて「な、なあリクオ君……ひょっとしてナギちゃんって……。」

リクオ「う、うん……ナギちゃんは財閥のお嬢様だよ。」

はやて「やっぱりそやったか……。まあ、執事を雇ってる時点でなんとなくわかつとったけど……。」

当麻「ああ、はやて?……言っとくけどナギの“お嬢様度”は格が違っぞ。」

はやて「へ?」

「護」そうだな、日本最大の財閥のお嬢様だな……。」

リクオ「あ、ちなみに言うと咲夜ちゃんと伊澄ちゃんも生粋のお嬢様だからね。ナギちゃんの家の分家の人だから、そこら辺のお嬢様よりはよっぽど財力があるし……。」

この時なのは達は思った。

なのは（そこら辺のお嬢様って、一体どのくらいのお嬢様のことなんだろう……。）

フェイト（まさか……アリサやすずかもその中に入っちゃうほどじゃないよね？……。）

実はその中に彼女達の親友であったお嬢様2人も入ってしまったというのを達は達を知るの……まだ先のことである。

はやて「そついえば咲夜ちゃんも伊澄ちゃんもリクオ君達のこと“お兄ちゃん”呼ばわりしとるけど何でや？ まさか3人もナギちゃんと親戚なんか!？」

リクオ「うづん、違つよ。」

当麻「ていつかもしナギの親戚だったらお金に苦労なんてしないだろ……」

一護「こいつらが勝手に呼んでんだよ。」

なのは「え？ でもどうして?」

一護「ああ、いや、こいつらこの通りお嬢様だろ？ だから財産目当てで狙ってくる奴もいてな。俺達が中1だった頃、ハヤテが執事になる前にその手の奴らに3人揃って誘拐されたことがあったんだ。」

リクオ「で、その瞬間を偶々僕達が目撃しててね。その人達を叩き潰して助けだしたら何かそう呼ばれるようになってたんだよね……。」

フェイト「叩き潰してって……えっと、一護達は大丈夫だったの？
相手はナギ達みたいなお嬢様を攫う人達だったんだよね？」

当麻「いや、助けさせたのは奇跡だったな……。相手はどっかの特殊部隊並みの装備を持った連中十数人だったし……。」

なのは・フェイト（いやいや、中学1年でそんな人達を叩き潰せないでしょ!?!）

はやて「ん？ でもナギちゃんは普通に呼んでおらんかったか？」

咲夜「いやいやはやて姉、ホンマは昔ナギが一番当兄達に懐いとっ
たんやで。」

ナギ「うわああ、咲／／／！！ 余計なことを言うな／／／／！！」

伊澄「ナギは昔はよく当麻兄様達に甘えて困らせていたわね。」

ナギ「い、伊澄まで何を言っておるのだ／／／！！」

当麻「あゝ、あの頃は大変だったな。意味わかない提案に付き合わされて地下迷宮に迷い込んだり、暗いのが苦手だから一緒に寝てくれとか頼まれたり、それから……」

ナギ「そ、それ以上言うなバカ者 ／／／／！！」

ドゴオオオオオンッ

当麻「ぐほっ！！！？？」

ナギは赤面しながら当麻の顎に見事なアツパーカットをお見舞いし、それを食らった当麻はあり得ない効果音と共に空高く舞い上がった。

なのは「にゃ、にゃあああ!?!??? と、当麻君!?!」

咲夜「いや、相変わらず当兄はええリアクションしてくれるさかいな〜!」

ハヤテ「え、ええ……かなりデカイダメージと代償にですけど……」

伊澄「ナギは当麻兄様達を“兄”と呼ぶのが恥ずかしいだけなのよね?」

ナギ「ち、違うノノノ!! 別にそんなんじゃノノノ……」

咲夜「何やもつと素直になればええのに……。別に恥ずかしがる必

要なんて無いやろ？」

一護「お前は少し恥じらいを持ちやがれ！　いきなり後ろから抱きつく奴がいるかよ！」

ゴンツ！

咲夜「痛っ！！　な、何すんねや一兄！」

一護「往来であんなことされたら俺まで恥ずかしいだろうが……！」

リクオ「あはは……。ま、まあ一護もその辺にして……」

てな具合で繰り広げられる当麻やナギ達の会話を見てなのは達は、

なのは「こうして見ると当麻君達、本当にナギちゃん達のお兄ちゃ

んみたいだね。》

フェイト《うん。》

はやて《ふふ、ホンマやね。》

微笑ましく見ているのであった……。と、ここでリクオが、

リクオ「あ、そうだ！ 綾崎君、どこかバイトを雇ってくれる店を知らない？」

ハヤテ「え？ バイトですか？」

リクオ「うん。実ははやて達のバイト先を探してるんだけど中々見つからなくて……」

ハヤテ「うーん……バイト先……あっ！」

するとハヤテは何かを思いついたような声を上げた。

「ハヤテ、一つお聞きしますが、皆さんはお料理などはできますか？」

なのは「え？」

「フェイト、う、うん。」

「は、あ、あ……。」

第9学区

ここにある噴水広場は休日でも比較的賑わいが少な

く落ち着いた雰囲気を漂わせている場所である。そしてそんな広場には、一件の喫茶店がひっそりと存在する。

「……ふう……日曜なのにも関わらず、やっぱりお客様は少ないわね……。」

女性的口調でそう呟くこの黒髪長身の男は加賀北斗。この喫茶店“喫茶どんぐり”の店主である。

「……まあ仕方ないですよ、マスター。ここは人気ひんげが他と比べてないですし……。」

「……でもこのまま赤字経営なのも結構まずいんじゃないかな？」

すると北斗の呟きに二人の人物が反応し、そう言った。1人はピンク色の長い髪の少女、もう1人は短い黒髪を頭の上の方で両側とも結っている少女であった。

北斗「確かに……いくら趣味で経営しているとはいえこのまま赤字なのもまずいわよね。でもお客さんを増やしても3人だけじゃ厨房と接客両方は手が回らないし……もう少し人手が欲しいわね……。」

「……?」今つて学園都市の学生つて増えてるんですよね?」

「……?」ええ。でもこの店の存在を知ってる人つて少ないし、料理ができる人がいてくれないと……。」

北斗「けど今つて中々料理できる子つて少ないわよね……はあ……こつという時にうちでバイトしてくれるつて子が現れたりしないものかしら……。」

と、その時、

カランカランッ

「???」「あ、いらっしやいませー!」

来客を知らせるベルが鳴り、ピンク色の髪の少女が応対する。その来客は……

当麻「この店来るのも久しぶりだな。」

一護「そついやそつか。」

リクオ「ご無沙汰してます。北斗さん!」

ハヤテ「あれ? ヒナギクさんに西沢さん?」

ナギ「なんだ、お前たちもいたのか。」

ヒナギク「か、上条先輩、黒崎先輩、奴良先輩!?!」

歩「そ、それにハヤテ君にナギちゃん!？」

当麻達とナギ、そしてハヤテだった。よく知る人物達の来客に2人の少女　ヒナギクと歩も驚く。

北斗「あら、あなた達3人は本当に久しぶりね。」

リクオ「はい。」

一護「ヒナギクと歩も久しぶりだな。」

ヒナギク「そうですね。まあ、上条先輩の方は一昨日ぶりですけど……」

当麻「あははは……。」

リクオ「どういうこと？ 当麻。」

当麻「いや、登校する時に巻き込まれたトラックの爆発事件で容疑者扱いされただろ？ あの事件の担当したのヒナギクだったんだよ。」

ヒナギク「ええ！？ ヒ、ヒナギクさん！？ 僕何も聞いてないんですけど！？」

ナギ「ヒナギク「え？ だってハヤテ君、電話しても繋がらなかったから。」

ナギ「ハヤテ、お前確か一昨日携帯を壊してしまっただろ？」

ハヤテ「あ、ああ、そういえば……なら連絡なくて当然ですね、ハハハハ……。」

ヒナギク「はあ、その件はもういいわ……それにしても、どうして先輩はいつも偶然事件に関わるんですか！？おまけに今回は容疑者扱いされてるなんて……ハヤテ君並みの不幸さですよ。」

当麻・ハヤテ「うっ！？」

ヒナギクの一言は当麻だけでなくハヤテにも精神的ダメージを与えた。

一護「相変わらずヒナギクは無意識の発言で他の奴にも攻撃するよな……。」

リクオ「あ、あははは……。」

ヒナギク恐るべし……。と……

北斗「それにしても皆揃って今日はどうしたのかしら？まさかただ店に来たって訳じゃないでしょ？」

当麻「あ、ああ。実は紹介したい奴らがいてな。おーい！ 入ってきていいぞ」「！」

当麻がそう言つと、

カランカランッ

入り口のドアが再び開きベルが鳴った。そして入ってきたのは……

なのは「えっと、こ、こんにちはー……。」

なのは達だった。

なのは「はじめまして。高町なのはって言います。」

フェイト「フェイト・ハラオウンです。」

はやて「八神はやてです。よろしゅうお願いします。」

そして自己紹介をする。

一護「こいつらは明日からうちの高等部の2年に転入転入することになってんだ。」

ヒナギク「あ、そうなんですか。私は桂ヒナギク。自由学園高等部1年でナギとハヤテ君のクラスメイトです。どうぞよろしく!」

歩「私は西沢歩。ハヤテ君やナギちゃん、それにヒナさんとはクラスメイトです! よろしくお願いします!」

ヒナギクと歩もなのは達に自己紹介をする。それを聞いたなのは達は、

なのは《こ、今度はキャラに続いてシャーリーまで……》

フェイト《でもシャーリーと違って凄く凛々しい感じだね……》

ヒナギクの声を聞いて某デバイスマスターのメガネっ子を思い出していた。すると北斗が、

北斗「あらあら、まさかついに当麻君達にも彼女ができるなんてね
」。」

なのは・フェイト・はやて「えっ／＼／＼／＼！！！！？？」

一護「お、おい、あんたもかよ北斗さん！？」

リクオ「何で彼女とかっていうことになるんですか！？」

北斗「ふふ、まあ冗談はその辺にしておいて……私は加賀北斗。ここ“喫茶どんぐり”のマスターよ。よろしくね。」

なのは・フェイト・はやて「は、はい……………」。

なのは達は北斗の喋り方に思わずギクシャクしてしまう。まあ、なのは達の元いた世界にはこういう類の人間はいなかったので、正直どう接していいのかわからないのだ……。

ハヤテ「えっとそれですね、北斗さん。確か以前、料理のできる人が何人か欲しいって言ってましたよね？」

リクオ「それで実は頼みがあるんですけど……………」

なのは・フェイト・はやて「私達をバイトとして雇ってほしいんです！　お願いします！」

するごとく、

北斗「一つ聞くけど、あなた達料理は？」

フェイト「あ、はい、できます。」

はやて「私も料理は得意や！」

なのは「私も………というか私実は喫茶店の娘なんで………」

北斗「決めたわ！ 即採用よ！」

当麻・一護・リクオ

「早っ！！？？」

なのは・フェイト・はやて「ありがとうございます……！」

ハヤテ「良かったですね皆さん！」

ヒナギク「そうになると私達バイト仲間ですね！」

歩「え、えっと、よろしく願いします！」

なのは「うん！」

はやて「よろしゅうな！ ヒナちゃんに歩ちゃん！」

という感じで店内は非常に喜びと活気に満ちていた。しかしそんな中、

ナギ「……………何の審査もなく質問一つで即採用ってどうなのだ？……………」

ナギは1人疑問に思っていた……。と、そこへ、

カランカランッ

北斗「あ、いらっしやいませー。」

来客を知らせるベルが鳴り入ってきたのは……

????「北斗、来た。」

????「毎日すみません、北斗さん。」

腰まで届きそうな長い黒髪で凛々しい顔立ちの小柄な少女と短いダークブラウンの髪で見た目大人しそうな少年だった。

一護「シャナ！ 悠二！」

悠二「あれ？ 当麻に一護にリクオ!!」

シャナ「ナギとハヤテも一緒にいたいね。」

ナギ「まあな。」

ハヤテ「こんにちは、シャナさん、悠二さん。」

悠二「ハヤテ、別に“さん”付けじゃなくていいよ。」

ヒナギク「お二人とも、いらっしやい。」

歩「いつも来てくれてありがとうございます!」

シヤナ「別に構わない。私が好きで来てるから……？ そっこの3人は誰だ？」

悠二「え？ あ、そういえば見たことない人達だね。」

リクオ「ああ、紹介するよ。この3人は明日うちの高等部の2年に転入してくる……」

なのは「高町なのはって言います。なのはでいいよ。」

フェイト「私はフェイト・ハラオウン。フェイトって呼んでね。」

はやて「私は八神はやてや。よろしゅうな！」

悠二「それじゃあ明日から同級生か。僕は坂井悠二、高等部2年で当麻達のクラスメイトだよ。よろしく。」

シャナ「当麻達のクラスメイトの平井シャナ。シャナでいい。」

なのは《アリサちゃんの声…これで4人目……。》

はやて《もう突っ込まへん……》

なのはとはやてはシャナの声を聞いて最早心の中で突っ込む気すらなくしていた。

274

北斗「いらっしやい、2人共。注文は……いつも通りでいいかしら？」

悠二「はい。」

シャナ「お願い。」

当麻「どうせだし俺達もなんか頼むか。」

一護「それもそうだな。」

リクオ「うん。」

なのは「あ、それなら手伝います。これからここで働くんですし。」

フェイト「はやて

「そうだね(せやね)。」

北斗「あら、いい心がけ。それじゃあ、お手並み拝見も兼ねて手伝って。ヒナちゃんと歩ちゃんはあれをお願いね。」

ヒナ・歩「はい！」

数分後

なのは「お待たせしました！ 当麻君と一護君、リクオ君、悠二君はコーヒー。シャナちゃんはホットココア。ナギちゃんとハヤテ君は紅茶だったよね？」

ナギ・ハヤテ「ああ（はい）。」

当麻「サンキュー、なのは。」

リクオ・一護「ありがとう（よ）。」

悠二・シャナ

「ありがとう。」

そして皆それぞれ飲み物を口を付けた。

当麻「ん？ このコーヒー旨いな。」

フェイト「あ、それ私が煎れたの。」

一護「フェイトが？」

フェイト「うん。私の母さんやお兄ちゃん、コーヒーに結構煩かったから。」

ハヤテ「この紅茶もおいしいです。」

ナギ「う、うむ。ハヤテが入れる紅茶とはまた違った旨さなのだ…。」

なのは「それは私の実家の喫茶店のオリジナルなの。」

ハヤテ「そうなんですか。いや、勉強になりました！」

シヤナ「……これ、おいしい……。」

はやて「あ、ホンマに？ それ私の家族によく出してた私特製のコアなんや。良かったわ、口に合って。」

という感じでなのは達の作った飲み物は大変好評だった。それを見た北斗は……

北斗「最早即戦力ね。バイトで雇ってるのが勿体ないくらい……。」

そう呟いていた……。と、ここでなのはが、

なのは「そういえばさっき北斗さんが言ってた“いつもの”って何？ なんかヒナちゃん歩ちゃんが作ってるみたいだけど……。」

「護」ああ、そいつは多分……」

するとそこに、

ヒナギク「はい、お待ちどうさま。」

ヒナギクと歩が何かを運んできた。それは……

歩「どんぐり特製のメロンパン3個です！」

フェイト「メロンパン？」

はやて「メロンパンなんてメニューにあったやろか？」

北斗「無いわよ。だってシャナちゃんのためだけに作ってるこの店の超裏メニューなんだから。」

なのは「ええ！？ シャナちゃんのためだけに！？ でもどうしてなんですか？」

当麻「それは平井が三度の飯よりメロンパンが好きだからだよ……。」

悠二「あはは、昔からシャナはメロンパンが好きだからね。」

はやて「ん？ 昔からってことは……ひよっとして2人は幼なじみかいな？ それともひよっとして恋人！？」

リクオ「その両方だよ、はやて。」

はやて「……………え？……………」

なのは「リ、リクオ君？」

フェイト「それって一体どういこと？」

リクオ「この2人は幼なじみで、しかも学園都市に来た時から恋人同士なんだよ。」

なのは・フェイト・はやて「……………ええええええっ！！??？」

リクオから聞かされた思わぬ事実になのは達は驚きの声を上げ、悠二とシャナを見た。すると、

悠二「あ、あははは……………」

シャナ「……………／／／／／。」

悠二は苦笑いを浮かべ、シャナは顔を真っ赤にしながらメロンパン

を頬張っていた……。

はやて「ホ、ホンマみたいやな……」

フエイト「ふ、2人が付き合ってたなんて……」

なのは「びっくりなの……」

当麻「まあこいつらが付き合ってるって話は学園じゃ結構有名だしな。」

シヤナ「う、う、うるさいうるさいうるさい／＼／＼／＼／＼……！」

シヤナ・悠二以外

「あははははは……！」

こうして賑やかなティータイムは過ぎていった……。

1時間後

いろいろな話をした後、「どんぐり」を出て皆それぞれ帰路に着いていった。

一護「なんか今日はかなり知り合いに多く会った上に1日の内容がかなり濃かった気がするな。」

リクオ「そうだね。今日だけで10人以上は会ってるよ多分……。」

当麻「その分不幸な目にも会ったけどな……。」

なのは「じゃはは……。」

「フェイト」でも皆、いい人達ばかりだ。」

はやて「せやね。皆温かく私らのこと受け入れてくれたな。」

当麻「まあな。この街には良い奴らがたくさんいるぜ。」

なのは「……でも私達の魔法を見たら皆……」

そう、実はなのは達は一度魔法を当麻達に見せているのだ。当麻達は最初こそかなり驚いていたがすぐに信用してくれた……だがそれで他の人達に理解されるかどうかはまた別である。やはり不安というのは付き纏うものなのだ……。すると一護は、

一護「心配ねえよ。ここは科学の街でもあるけどよ、同時に非科学現象のオンパレードな街でもあるんだ。説明のつかないような力を持った連中はたくさんいる。今日だったけど、そういう奴らが。」

一護にそう言われてなのは達は思い返す。電気を自在に発生させる御坂美琴……………。レポートのできる白井黒子……………。あり得ない怪力を持つ神楽……………。そして異常な速さで自転車を走らせるほどの身体能力を持った綾崎ハヤテ……………。今思えば皆、なのは達の元いた世界には絶対いなかった人物である。

当麻「俺達もここに来た時は不安だったけどな……………。それも一瞬で馬鹿馬鹿しく思えてきちまつたくらいだ。この街はお前らの魔法で狂うほど脆くもないし、器も小さくねえよ。だから……………。笑っていいんだ、お前らは……………。」

そう言い放つ当麻は夕焼けに照らされていて一層輝いて見えた……………。そしてそれを見たなのは達も……………。

なのは・フェイト・はやて「……………。うん!」

自然と笑顔になるのであった……………。

E
N
D

同じ声の人間も多すぎると作為を感じる！（後書き）

どうも黒狼です！！

という訳で銀魂、ハヤテのごとく、そして灼眼のシャナのキャラを出しました！

今回銀魂は神楽のみでしたけどこれから先いっぱい出す予定です。この作品の主軸アニメの一つですので！

またハヤテのごとくは今回主要キャラをほぼ全員出しました！ 西沢さんなんかは他のクロスオーバーだと出演皆無なんですけど、自分は嫌いではないので出演させました。まあ、声優ネタに使えるんじゃない？という考えもあつたんですけどね……。あ、唯一主要キャラで出なかったあの不器用少年も当然出しますよ。彼の声の声優さんもりりなのに出てますからね。……キャラ的にはりりなののがキラの方が好きなのですが……。

灼眼のシャナに関しては今アニメ最終章やってるので出してみましたが。ですが内容はほぼ知らないと言ってもいいくらいなので原作とだいぶキャラが違っててもかもしれません、ごめんなさい！ ですがいずれこの作品で灼眼のシャナを中心としたシリアスでも書いてみようかなと思ったりもしています。

すみません！ 後書きまでグダになってしまいました！ 次回は新しく現れたキャラの紹介を書こうと思います！ ひょっとしたら一部に分けるかも……。

ではまた！

キャラ紹介（とある魔術の禁書目録&緋弾のアリア） ネットバレあり！！（前書

キャラ紹介って意外と大変であるということに気付いた今日この頃
です……。

今まで出てきたキャラの紹介です！ 今回は禁書目録&緋弾のア
リです！

またキャラの使用している銃や刀も書いてあるので、詳しく知りた
い方はWikipediaとかで調べてみてください！

ではどござー！！

キャラ紹介(とある魔術の禁書目録&緋弾のアリア) ネットバレあり!!

とある魔術の禁書目録

土御門元春

年齢 17

身長 179

能力 陰陽術

V 勝杏里

（“BLACKCAT”のバルドリアス・S・ファンギーニ、“魔法少女リリカルなのはStrikersサウンドステージ”のヴォルツ・スターン、“NARUTO”の赤銅ヨロイetc.）

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。逆立った金髪とグラサンが最大の特徴。また私服は基本アロハシャツである。

普段は語尾に「〜だぜい。」「や〜にやー。」を付けて喋るが真面目な場面では普通の口調に戻る。

学園内では“3バカデルタフォース”の一角として認知されており成績は当麻より悪く下の中だが、本気を出せば上位ランカーと同等の実力を持っていて、頭の回転の良さに関しては学園内では1、2を争うほど速い。

統括理事長の親船から銃刀携帯特別免許の取得を許可されており常に拳銃を所持していて、使用拳銃は“モーゼル 96”。また体術に関しては一護と互角で渡り合えるほどの腕前。

親船とはかなり前からの知り合いのようで彼女の依頼を受けて単独で調査をすることも少なくない。そのため学校にこない日もありそれがバカの理由とも言える。

実は世界最高の陰陽師と言われており、折り紙を用いて炎属の術式や探知術式などを扱い、中でも水属性の術式が得意である。原作とは違い肉体強化が無い^{オートリパース}ため普通に陰陽術を使えるが、余程のことが無いかぎり使用しない。家柄の関係上、鷺ノ宮伊澄とは彼女が幼い頃から親しく彼女にとっては師匠的立場でもある。

ちなみに高校生にも関わらず当麻達の住んでいるアパートの大家でもある。また重度のシスコンで、同じ部屋で同居している妹を溺愛しており、正直手を出していないかどうかどうかも怪しい関係らしい。

御坂美琴

年齢 16

身長 161

能力 発電能力者
(エレクトロマスター)

V 佐藤利奈(“魔法先生ネギま!”のネギ・スプリングファイ

ールド、“青のエクソシスト”の霧隠シユラ、“みなみけ”の南春香 e t c .)

自由学園高等部の1年生で短い茶髪に整った顔立ちが特徴。かなりのお嬢様育ちのようだが、コンビニで漫画を立ち読みしたり制服のスカートの下に短パンを履いたりしているなど上品とは言い難い。

学校での成績は非常に優秀で常に学年トップ5の成績を修める上に運動神経も抜群である。また性格はかなり負けず嫌いかつ男勝りなところがあるため、学園内では男女共に慕われ人気も高い。

能力は発電能力者。エレクトロマスター超能力の一種で体から最大10億ボルトの電気を発生させ自在に操ることができる。またコインを用いたオリジナル技“レールガン超電磁砲”は彼女の異名にもなっていて、その威力は戦車も一撃で破壊できる。また砂鉄を集めて剣を作ったり電子操作によるクラッキングしたりできるなど応用性の高い能力でもある。ちなみに原作では“超電磁砲”が能力名となっているがこの作品ではあくまで技名である。

原作のように当麻に対して好意を抱いているかは不明。

白井黒子

年齢 16

身長 157

能力 空間移動

(テレポート)

V 新井里美

(“オオカミと七人の仲間たち”のナレーション、“生徒会役員共”の畑ランコ、“フェアリーテイル”のビスカ・ムーラン e t c .)

自由学園高等部1年生で美琴のクラスメイト。赤みがかった茶髪のツインテールと語尾に「〜」ですの。「や〜」ですわ。」のようなお嬢様口調が特徴。

美琴を「お姉様」と呼んで慕っているが、能力を使つての過激なスキンシップで美琴に鉄拳制裁を食らうのが日常茶飯事となっている。学校での成績は美琴ほどではないがやはり上位優秀者で身体能力も高く、女子からはかなり慕われている。男子からは微妙（美琴への態度から百合属性があると思われるため）。

第177支部所属の風紀委員で不良などからは“腹黒テレポーター”などの異名でかなり恐れられている。

能力は空間移動^{テレポート}。超能力の一種で自分あるいは自分が触れている物を空間移動させることができる。基本的には相手の頭上に空間移動してドロップキックしたり、相手を逆さまに空間移動させて転ばせたり、太もみに忍ばせている鉄の棒を瞬間移動させて相手の服を射ぬき壁や床に張りつけたりして相手を攻撃し無力化する。

親船最中

V 清水香里《仮》

(“リリカルなのはstrickers”のミゼット・クローベルの声をイメージ。)

学園都市統括理事会理事長で名実共に学園都市のトップを務める初老の女性。

統括理事会の中で一番の人格者であり、同時にかなりの善人でもあるため(本人はそれを否定している)、当麻達からはかなり信用されている。

自由学園高等部の数学教師である“親船素甘”は彼女の1人娘であり、娘の編んだセーターを着るなど娘想いの母親という側面も持つ。

だがその一方で非常に策略家で交渉術においてはかなり長けている。その実力は昔外務省から外交官として何度もオファーされたこともあるほどらしい。

海原光貴（本名エツアリ）

年齢 17

身長 174

能力 トライウィスカルパンテクウトリの槍

V 岸尾だいすけ

（“D・スダ・カーポ”の杉並、“フェアリーテイル”のロキ、“クロスゲーム”の千田圭一郎 e t c .）

親船の側近で常に白いスーツを着ている少年。見た目は黒髪の日本人だが本名の通り南米系の外国人で素顔は褐色肌らしい。基本的に

は穏やか且つ物腰の柔らかい性格で誰に対しても敬語で話すが、一方で腹黒い一面もある。

能力はトラウイスカルパンテクウトリの槍。金星の光を黒曜石のナイフで反射しその光を浴びたものを構成するパーツに分解することができる。ただし対象は1度につき1つであるため複数相手には不向き。また相手の皮膚を用いて変装することもできる。

原作同様、美琴に惚れており彼女を守るために動くこともある。

結標淡希

年齢 17

身長 163

能力 座標移動

(ムーヴポイント)

V 櫻井浩美

(“Angel Beats”の仲村ゆり、“フェアリーテイル”の
リサーナ、“恋姫無双”の孫権 et c.)

海原と同じく親船の側近を務める少女。長い赤髪を2つに分け、上半身は胸を隠す程度の桃色の布の上からブレザーを羽織り、下はミニスカートだけというかなり露出度の高い格好をしている。

冷めた性格をしているがシヨタコンであるという噂がある……。

能力は座標移動。ムーヴポイント超能力の一種で、テレポート空間移動とは違い、触れていなくても物体を移動させることができる。昔能力を誤って使用して大怪我を負ったためトラウマになっていたが、現在はそれを克服しているため自分を移動させることも可能になっている。

また装備として警棒兼用の軍用懐中電灯を所持している。

緋弾のアリア

遠山キンジ

年齢 17

身長 176

能力 SS ヒステリア・サバン・シンドローム

V 間島淳司

（ “とらドラ！”の高須竜次、 “これはゾンビですか？”の相川歩、

“花咲くいろは”の宮岸徹 e t c .)

自由学園高等部2年生で、当麻達のクラスメイト。遠山金四郎の子孫で、兄が1人いたが亡くなっているらしい。

学校の成績は普段は当麻と同じで中の下、運動神経も普通より少し上程度である。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”のリーダー。

能力は ヒステリア・サバン・シンドローム S S、通称“ヒステリアモード”。性的興奮状態になった際身体能力が通常の30倍に向上する遠山家の特異体質で、頭脳も学年成績トップ3を争えるほど良くなるが、女を守ることを最優先事項としてしまつて周りが見えなくなつたり、気障な言動をしまつなどの反作用もあり、本人はこの能力を少なからず嫌っている。

ヒステリアモードを避けるために女性との接触などを避けてきたので恋愛には鈍感。

武器は原作の1学期と2学期の武器を両方所持していて、ベレッタ 92F、デザートイーグル・50 の2つの自動式拳銃とバタフライナイフ、長剣「スクラマ・サクス」、そして格闘用グローブの「オロチ」の5つである。

神崎・（ホームズ）・アリア

年齢 17

身長 142

能力 緋色の攻力
（スカーレット・フォース）

V 釘宮理恵

（“リリカルなのは”のアリサ・バニングス、“フェアリーテイル”のハッピー、“テイルズオブシンフォニア”ラタトスクの騎士“”のマルタ・ルアルディ e t c .）

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。ピンク髪のツインテールと赤紫色の瞳が特徴。好きなものは“喫茶どんぐり”のももまん、嫌いなものは雷と水泳。まようはカナツチ

直情的かつツンデレな性格で、何も考えずに物事に突っ込むことが多い。口癖は「風穴開けるわよ!」。学校での成績は常に上位で、特に外来語に関しては昔海外を転々としていたため17カ国語を話せるらしい。また運動神経も抜群である。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、最強最悪の風紀委員集団“バスカービル”の副リーダー。“二刀二銃のエリア”や“緋弾のエリア”の異名を持っている。

イギリスの名探偵“シャーロック・ホームズ”の曾孫であるが、推理力に関しては皆無である。

能力は緋色の攻力。スカレット・フォース体内に埋め込まれた“緋緋色金”という物質によつて全てを消し去る“緋弾”を放つなど超常的な力を発揮することができるが、あまりこの力を使うことはないらしい。

使用武器は二刀二銃カトラの名の通り、2本の小太刀とコルトガバメント2丁で、“バリリトウード”つまり総合格闘技も会得している。

星伽白雪 ほしぎ

年齢 17

身長 162

能力 シャーマン
鬼道

V 高橋美佳子
（“リリカルなのは”のクロノ・ハラオウン、“テニスの王子様”の竜崎桜乃、“スーパーロボット大戦 G”のクスハ・ミズハ
tc.)

自由学園高等部2年生で当麻達のクラスメイト。黒髪ロングヘア

の“大和撫子”と呼ぶに相応しい雰囲気の特徴で、穏やかでほんわかとした性格。文武両道の超優等生で自由学園高等部の2年生徒会の会長を務めており学園での人気は女子の中で1、2を争うほど高い。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、“バスカービル”のメンバー。

能力は鬼道^{シャーマン}。一護の死神とはまた違った鬼道で、中でも炎属の術が得意である。また“星伽候天流”という剣技の使い手でもあり、その実力は車を石川五門の“斬剣”よろしく真つ二つに両断してしまうほど。

使用武器は日本刀“色金殺女”^{いろかねのあやめ}と鎖鎌、そして60。キンジとは幼なじみであり同時に好意を抱いている。そのレベルは毎日弁当を作るなど身の回りの世話をしたり妄想に浸ったりするほど。だが当の本人には気付いてもらっていない。

また実・義理を含めて妹が6人いるらしい。

峰理子

身長 156

能力 念動力

(テレキネシス)

V 伊瀬茉莉也

(“フェアリーテイル”のレヴィ・マクガーデン、“エア・ギア”の野山野林檎、“初恋限定”の有原あゆみ e t c .)

自由学園高等部2年生で、当麻達のクラスメイト。ゆるい天然パーマの長い金髪をツーサイドアップに結っていて幼い顔立ちなのが特徴。また意外と巨乳である。性格は基本的にバカっぱいが、真面目な場面では鋭い口調になり雰囲気も大きく異なる。

学校での成績は意外に優秀で常に上位近くに食い込み運動神経も

良く、クラスではムードメーカー的存在。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、バスカービルのメンバー。情報収集と変装などの諜報分野におけるエキスパートで、SS時のキンジとアリア2人を相手に互角以上で張り合えるほどの実力も持っている。

本名は理子・峰・リュパン4世。アルセーヌ・ルパンの曾孫である。

能力は念動力^{テレキネシス}。自分の髪をまるで手足のように自由自在に操ることがができる。

使用武器は2丁のワルサー 99とウィンチエスター 1887、デリンジャーで、また時速150キロ出せる軍用スクーターバイク“ベスパ”も所有している。

大胆な行動をしてキンジをからかったりすることが多いが、実際はキンジに対して好意を寄せている。

レキ（蕾姫）

年齢 17

V 石原夏織

(“ 輪廻のラグランジェ ” の京乃まどか e t c .)

自由学園高等部2年生で、当麻達のクラスメイト。エメラルドグリーン色の短い髪を結っているのが特徴。学校での成績は常に上位で運動神経もそれなりに良い。無口・無表情のため学園内では“口ポット・レキ”のあだ名で呼ばれていて、クラスの中では目立たない存在である。

銃刀携帯特別免許を所持している第184支部所属の風紀委員で、バスカービルのメンバー。狙撃のスペシャリストで、その腕前はおそらく世界トップクラス。ただ銃剣以外の近接戦闘は苦手。

視力は原作よりも上の8・0で遠くの物もスコープなしで見える。常にヘッドホンで風の音を聞いている。また食事は常にカロリーメイトで、寝る時は銃を抱えたまま体育座り。猛獣を短時間で手懐けるといいう特技を持っており、自室に“ハイマキ”という白い狼を飼っているらしい。

“ウルス族”というモンゴルの遊牧民族の出身で、チンギス・ハーンこと源義経の子孫。使用武器はドラグノフ狙撃銃(SVD)と

銃剣、そしてバレット 82。

どうも！ 黒狼です！

今更書いてて気付いたことがあります……。

なのは達の背丈を縮めなきゃよかった　！！

いや、なのは達って縮まなくても結構小柄だったんですね。美琴の身長がなのはより上だなんてこれっぽっちも思わなかったです……。
……。ちなみに美琴とアリア以外は身長がわからなかったため適当です。

能力に関しても結構変更点を増やしました。特に土御門に関してはアニメで毎回魔術使っては血を吐いている姿を見て、すごく不憫に思えてきたので肉体再生オートリパースを消しました。あと伊澄とは親しいという設定はだいぶ前から決めていましたよ。

気付いた方も多いと思いますが、アリアの能力名はかなり適当です。自分でも“ネーミングセンス無いな……”と思いました。御勘弁下さい！

今回もあとがきがグダグダしてしまった……。次はハヤテのごとく
&灼眼のシャナの紹介です！

ではまた！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987x/>

自由学園～少年少女の青春録～

2011年11月2日14時14分発行